

マルチメディア工学

マルチメディアデータの解析

基礎数理：直交変換, 直交関数展開

佐藤 嘉伸

大阪大学 大学院医学系研究科
放射線統合医学講座

yoshi@image.med.osaka-u.ac.jp

<http://www.image.med.osaka-u.ac.jp/member/yoshi/>

講義ホームページ: 日本語ページ → 授業の資料 → マルチメディア工学

マルチメディア工学：講義計画

- インTRODクシヨン
- コンピュータグラフィックス (Computer Graphics: **CG**)
- マルチメディアデータの解析

マルチメディア工学：講義計画

- インTRODクシヨン
- コンピュータグラフィックス (Computer Graphics: **CG**)
- **マルチメディアデータの解析**
 - **基礎数理**
 - 最小二乗法
 - 直交変換、直交関数展開
 - 代表的解析手法

マルチメディアデータの解析

- 基礎数理
 - 最小二乗法
 - 直交変換、直交関数展開
- 代表的解析手法
 - データ圧縮：離散コサイン変換とJPEG
 - データ表現：形状の主成分分析
 - (データ認識：隠れマルコフモデル)
 - 音声・言語を含む時系列データに対して有効
 - (音声の独立成分分析)

基礎数理： 直交変換、直交関数展開

- 直交変換
 - 直交変換(直交行列)定義、正規直交基底
 - 直交変換の利点、直交の必要性
- 直交関数展開
 - ベクトルから関数へ
 - 直交関数系
 - 直交関数展開

直交変換

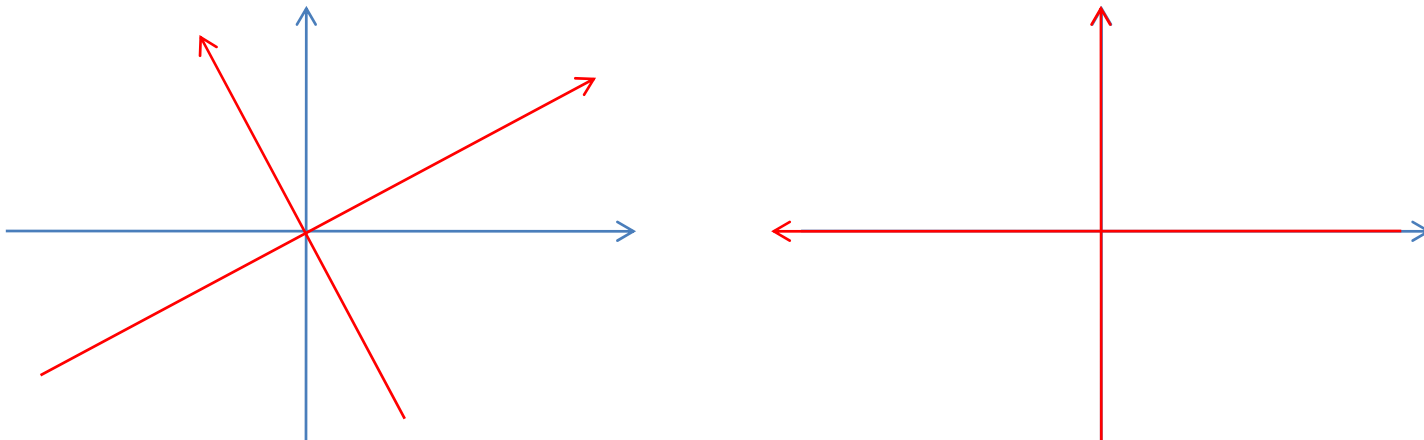
直交変換(直交行列)の定義

正規直交基底

直交変換・直交行列

(Orthogonal Transformation, Orthogonal Matrix)

- 直交変換の定義 (直観的解釈)
 - 内積の値を変えない一次 (線形) 変換
 - すなわち、2ベクトル間の角度、ベクトルの長さが変わらない変換
 - 直交座標系から別の直交座標系への変換 (回転、対称変換、Permutation (軸の入れ替え) など)



直交変換・直交行列

(Orthogonal Transformation, Orthogonal Matrix)

- 直交変換の定義 (数学的解釈)

- 内積の値を変えない一次 (線形) 変換

- すなわち、任意の2ベクトル \mathbf{u}, \mathbf{v} に対して、

- $(\mathbf{u}, \mathbf{v}) = (T\mathbf{u}, T\mathbf{v})$ が成立 (T は正方行列)

$$(\mathbf{u}, \mathbf{v}) = \mathbf{u}^T \mathbf{v} = (T\mathbf{u})^T (T\mathbf{v}) = \sum_i (\sum_j T_{ij} u_j) (\sum_k T_{ik} v_k)$$

$$= \sum_{ijk} u_j (T^T)_{ji} T_{ik} v_k = \mathbf{u}^T T^T T \mathbf{v}$$

- T は、 $T^T T = T T^T = E$ を満たす正方行列 (直交行列)

- $\sum_j T_{ji} T_{jk} = \delta_{ik}$ (クロネッカーのデルタ) $\delta_{ik} = \begin{cases} 1 & i = k \\ 0 & i \neq k \end{cases}$

直交変換・直交行列

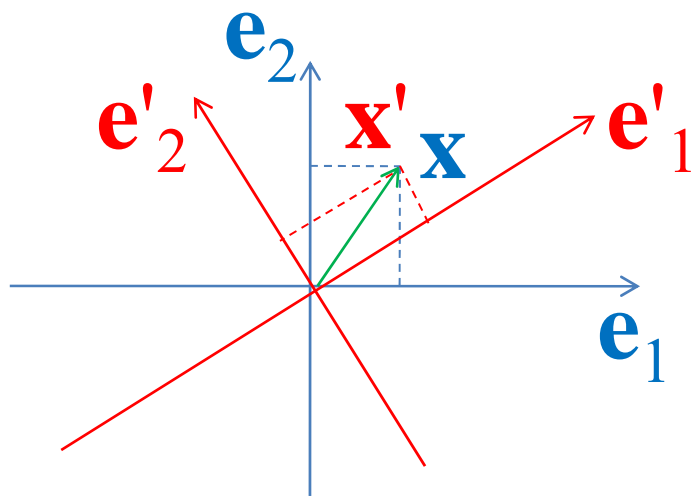
(Orthogonal Transformation, Orthogonal Matrix)

- 直交変換 $T^T T = T T^T = E$

$$\sum_j T_{ji} T_{jk} = \delta_{ik} \quad (\text{クロネッカーのデルタ}) \quad \delta_{ik} = \begin{cases} 1 & i = k \\ 0 & i \neq k \end{cases}$$

回転

$$T = \begin{pmatrix} \cos \theta & \sin \theta \\ -\sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}, \quad T^T = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}, \quad T T^T = T^T T = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$



$$\mathbf{x}' = T \mathbf{x}$$

$$\mathbf{x} = T^T \mathbf{x}'$$

$$|\mathbf{x}| = |\mathbf{x}'|$$

$$T = \begin{pmatrix} \cos 30^\circ & \sin 30^\circ \\ -\sin 30^\circ & \cos 30^\circ \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \sqrt{3}/2 & 1/2 \\ -1/2 & \sqrt{3}/2 \end{pmatrix}$$

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}$$

$$\mathbf{x}' = \begin{pmatrix} \sqrt{3}/2 & 1/2 \\ -1/2 & \sqrt{3}/2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} (2+\sqrt{3})/2 \\ (-1+2\sqrt{3})/2 \end{pmatrix}$$

直交変換・直交行列

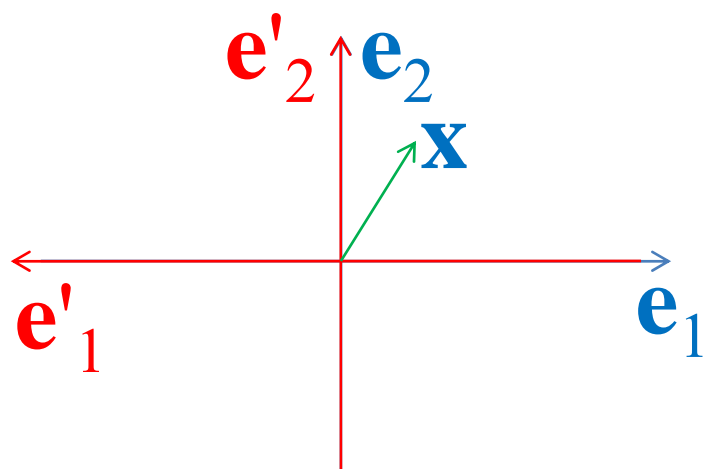
(Orthogonal Transformation, Orthogonal Matrix)

- 直交変換 $T^T T = T T^T = E$

$$\sum_j T_{ji} T_{jk} = \delta_{ik} \quad (\text{クロネッカーのデルタ}) \quad \delta_{ik} = \begin{cases} 1 & i = k \\ 0 & i \neq k \end{cases}$$

対称変換

$$T = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad T^T = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}, \quad T T^T = T^T T = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$



$$\mathbf{x}' = T \mathbf{x}$$

$$\mathbf{x} = T^T \mathbf{x}'$$

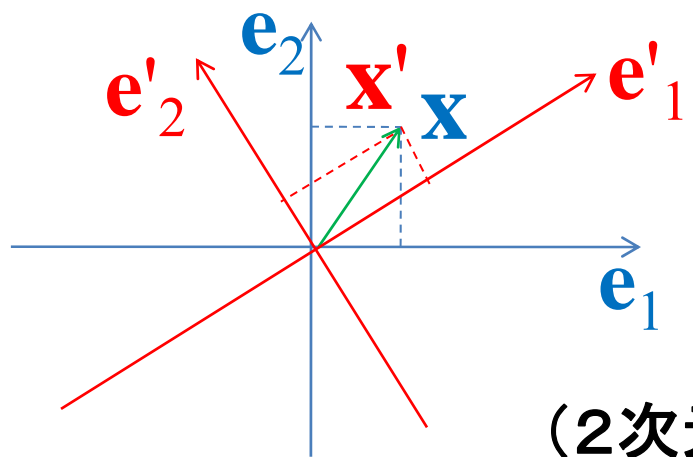
$$|\mathbf{x}| = |\mathbf{x}'|$$

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix}$$

$$\mathbf{x}' = \begin{pmatrix} -1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} -1 \\ 2 \end{pmatrix}$$

直交変換：正規直交基底

$$T = \begin{matrix} \mathbf{e}'_1 \\ \mathbf{e}'_2 \end{matrix} \begin{pmatrix} \cos\theta & \sin\theta \\ -\sin\theta & \cos\theta \end{pmatrix}, \quad T^T = \begin{matrix} \mathbf{e}'_1 \\ \mathbf{e}'_2 \end{matrix} \begin{pmatrix} \cos\theta & -\sin\theta \\ \sin\theta & \cos\theta \end{pmatrix}, \quad TT^T = T^T T = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$



$$\mathbf{x}' = T\mathbf{x}$$

$$\mathbf{x} = T^T\mathbf{x}'$$

$$|\mathbf{x}| = |\mathbf{x}'|$$

$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} (\mathbf{x}, \mathbf{e}_1) \\ (\mathbf{x}, \mathbf{e}_2) \end{pmatrix}$$

$$\mathbf{x}' = \begin{pmatrix} x'_1 \\ x'_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_1) \\ (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_2) \end{pmatrix}$$

(2次元) 正規直交基底

$$\mathbf{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

$$|\mathbf{e}_1| = |\mathbf{e}_2| = 1, \quad (\mathbf{e}_1, \mathbf{e}_2) = 0$$

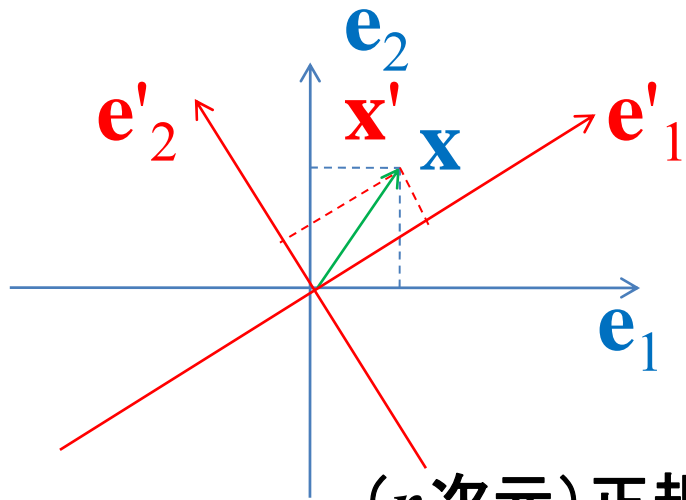
$$\mathbf{e}'_1 = \begin{pmatrix} \cos\theta \\ \sin\theta \end{pmatrix}, \quad \mathbf{e}'_2 = \begin{pmatrix} -\sin\theta \\ \cos\theta \end{pmatrix}$$

$$|\mathbf{e}'_1| = |\mathbf{e}'_2| = 1, \quad (\mathbf{e}'_1, \mathbf{e}'_2) = 0$$

$$\mathbf{x} = x_1\mathbf{e}_1 + x_2\mathbf{e}_2 = x'_1\mathbf{e}'_1 + x'_2\mathbf{e}'_2$$

同一ベクトルを異なる直交座標系(直交基底)で表現

正規直交基底： n 次元ベクトル空間への一般化



$$\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ \vdots \\ x_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} (\mathbf{x}, \mathbf{e}_1) \\ (\mathbf{x}, \mathbf{e}_2) \\ \vdots \\ (\mathbf{x}, \mathbf{e}_n) \end{pmatrix} \quad \mathbf{x}' = \begin{pmatrix} x'_1 \\ x'_2 \\ \vdots \\ x'_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_1) \\ (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_2) \\ \vdots \\ (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_n) \end{pmatrix}$$

(n 次元) 正規直交基底 (直交座標系の座標軸ベクトル)

$$\mathbf{e}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \\ \vdots \\ 0 \end{pmatrix}, \quad \mathbf{e}_2 = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \\ \vdots \\ 0 \end{pmatrix}, \quad \dots, \quad \mathbf{e}_n = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ \vdots \\ 1 \end{pmatrix}$$

$(\mathbf{e}_i, \mathbf{e}_j) = \delta_{ij}$ (クロネッカーのデルタ)

$$\mathbf{e}'_1 = \begin{pmatrix} e'_{11} \\ e'_{12} \\ \vdots \\ e'_{1n} \end{pmatrix}, \quad \mathbf{e}'_2 = \begin{pmatrix} e'_{21} \\ e'_{22} \\ \vdots \\ e'_{2n} \end{pmatrix}, \quad \dots, \quad \mathbf{e}'_n = \begin{pmatrix} e'_{n1} \\ e'_{n2} \\ \vdots \\ e'_{nn} \end{pmatrix}$$

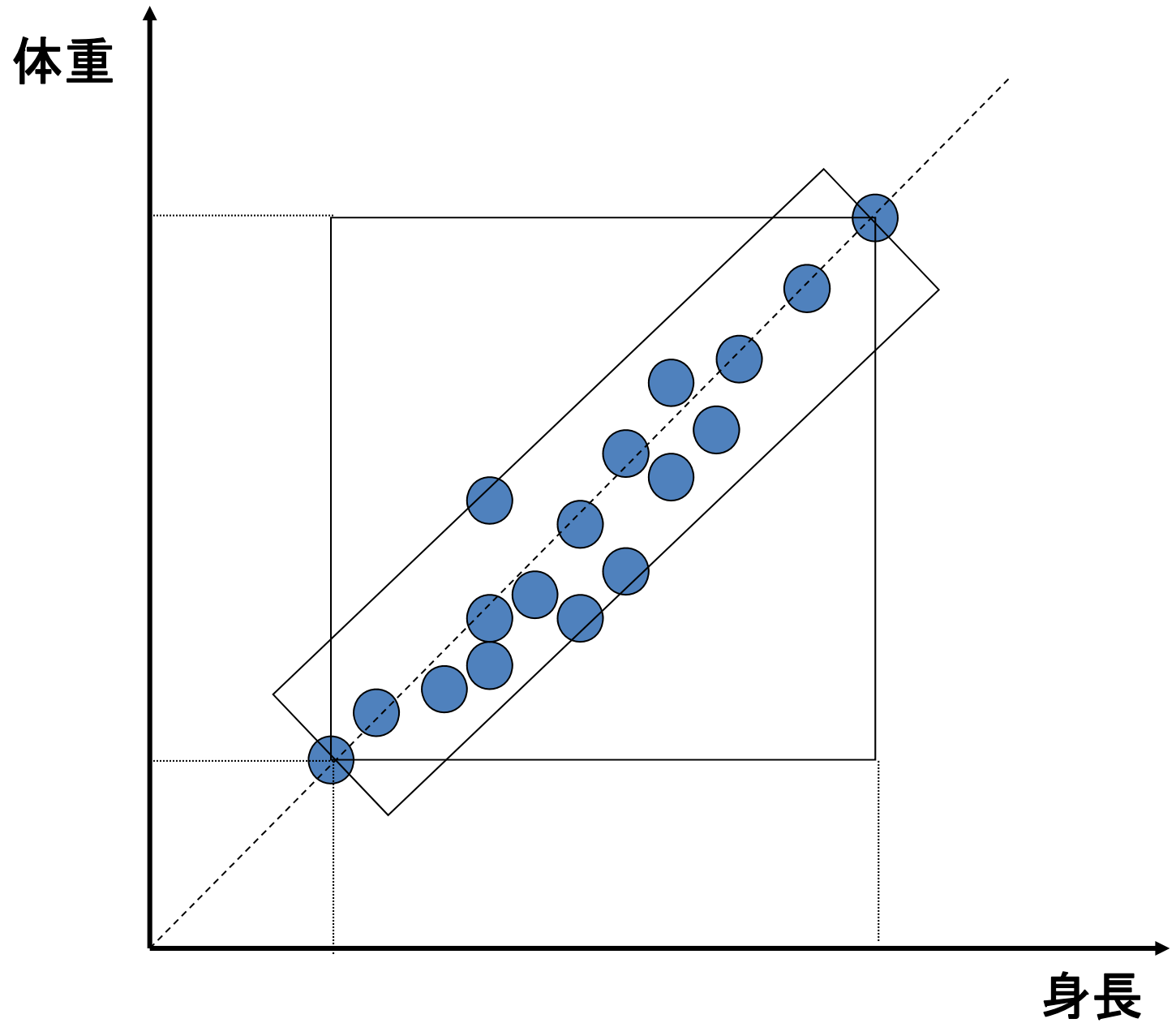
$(\mathbf{e}'_i, \mathbf{e}'_j) = \delta_{ij}$ (クロネッカーのデルタ)

$$\mathbf{x} = x_1 \mathbf{e}_1 + x_2 \mathbf{e}_2 + \dots + x_n \mathbf{e}_n = x'_1 \mathbf{e}'_1 + x'_2 \mathbf{e}'_2 + \dots + x'_n \mathbf{e}'_n$$

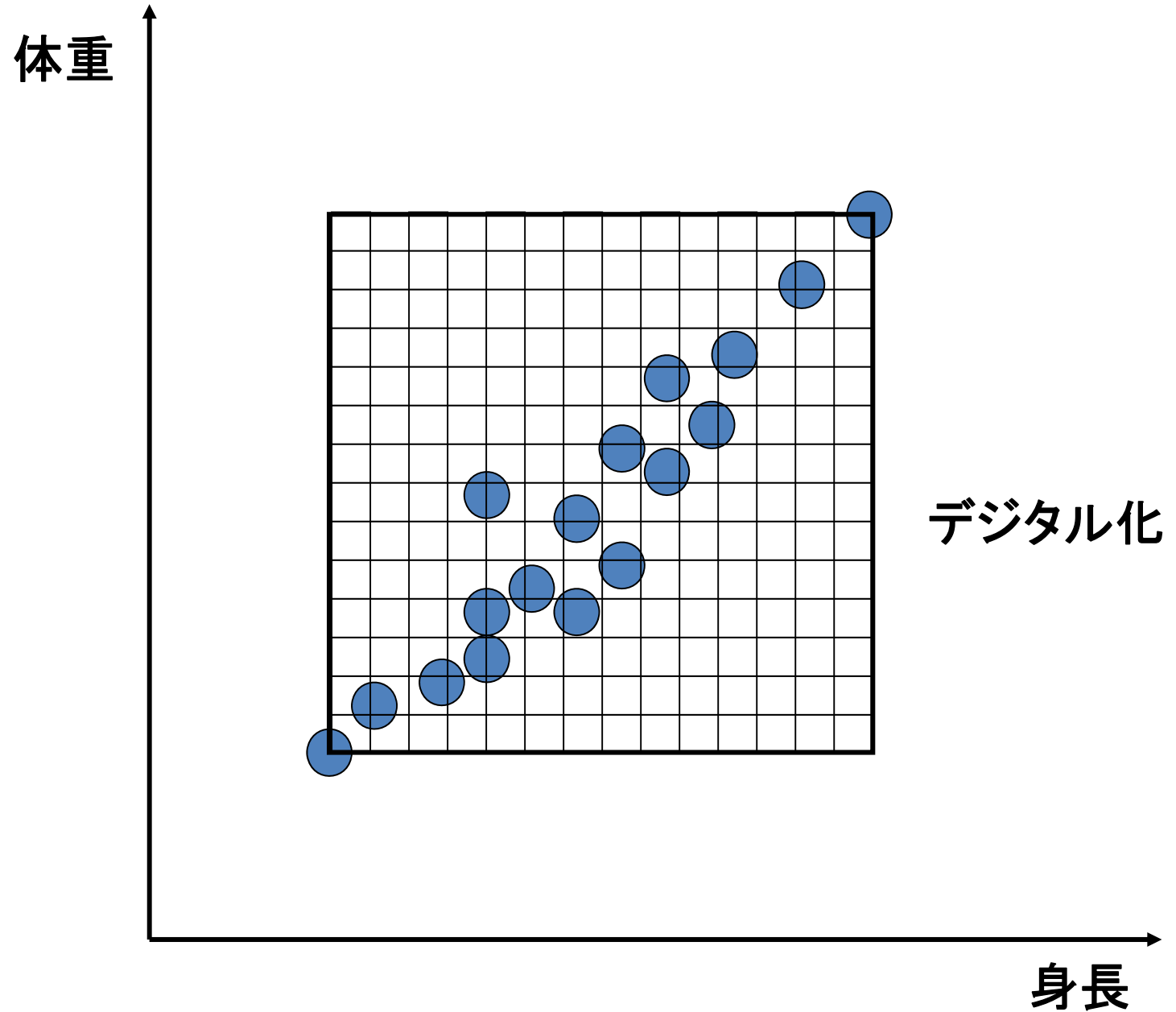
同一ベクトルを異なる直交座標系(直交基底)で表現

直交変換の利点

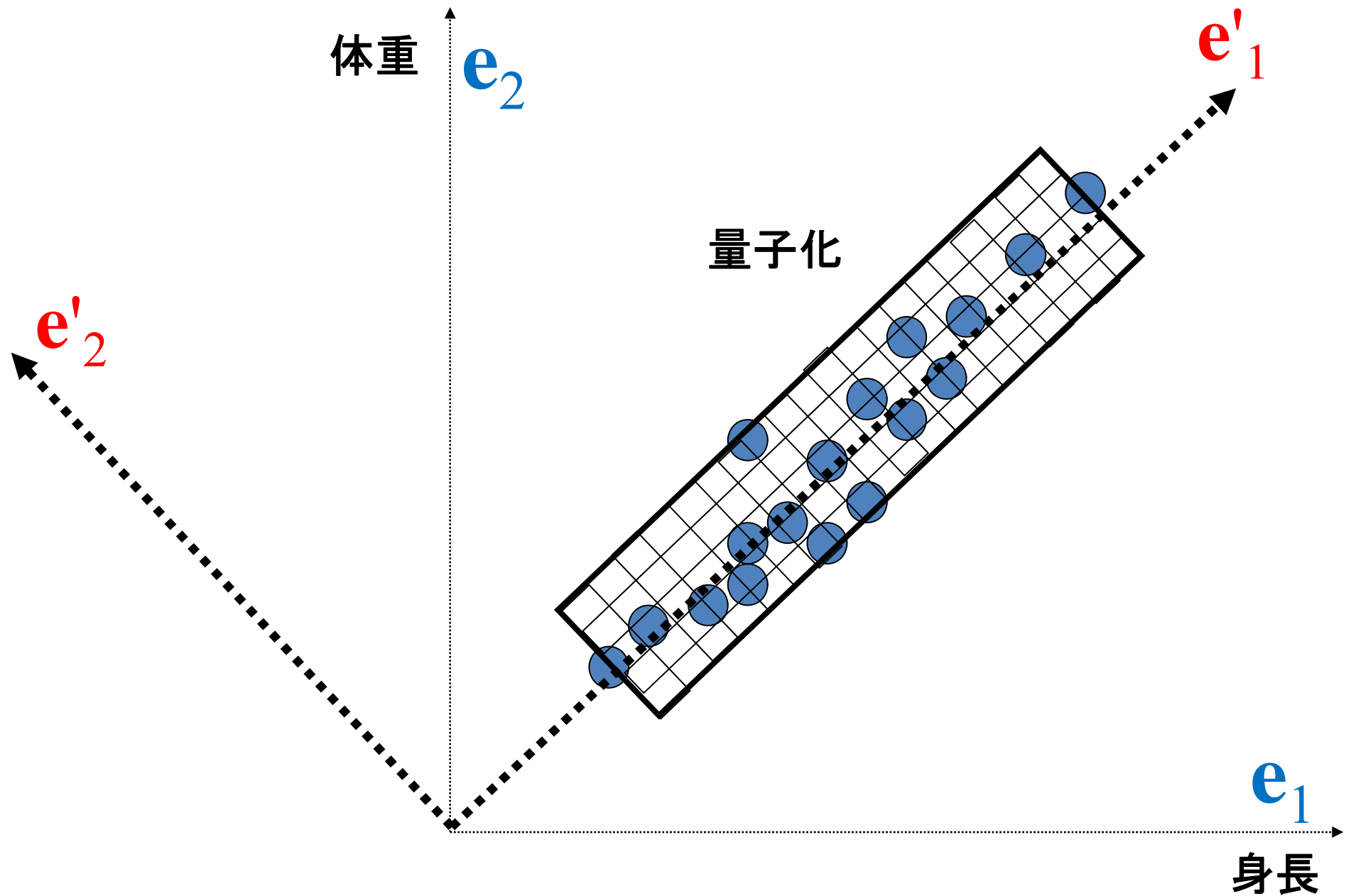
直交変換の利点



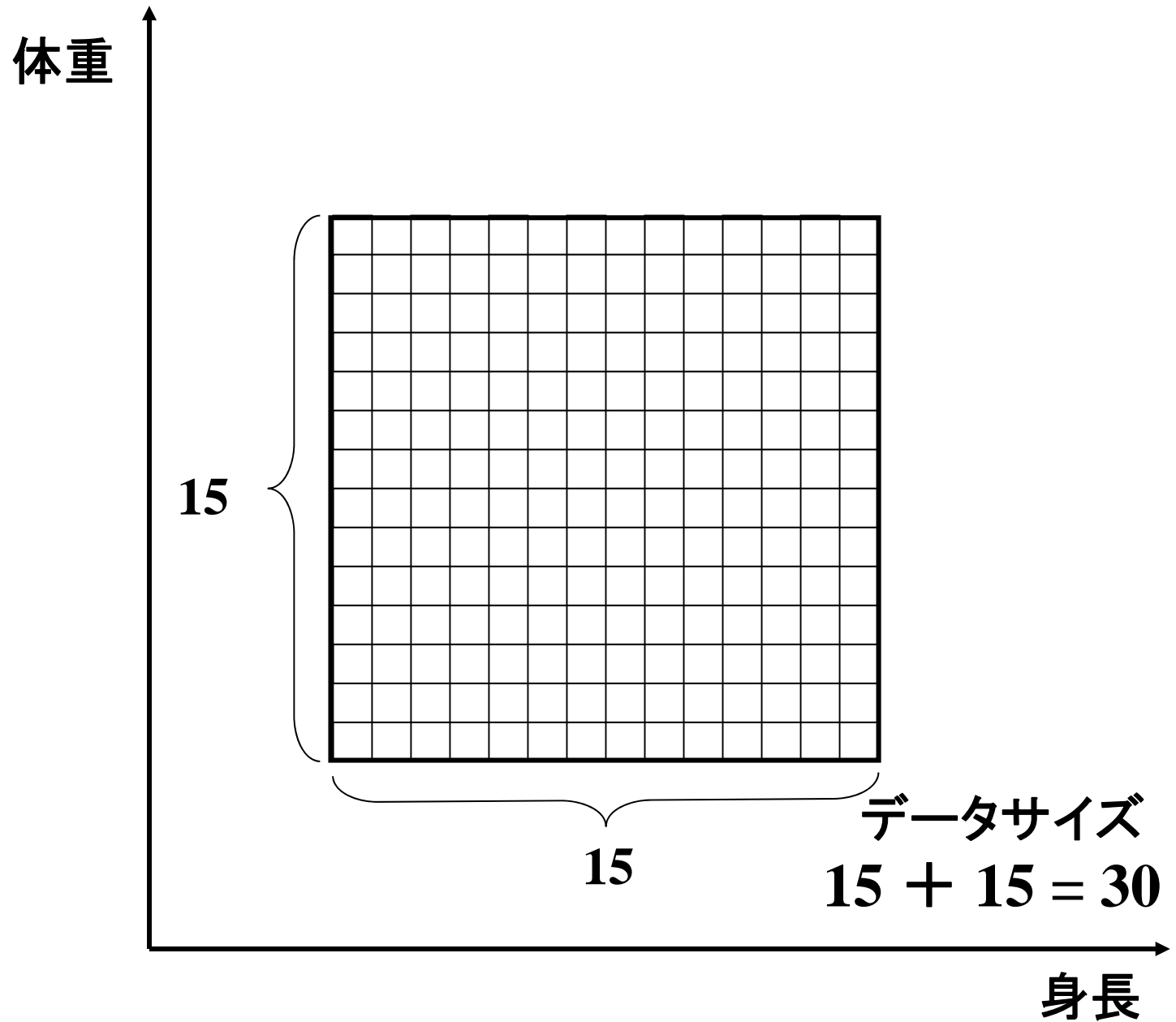
直交変換の利点



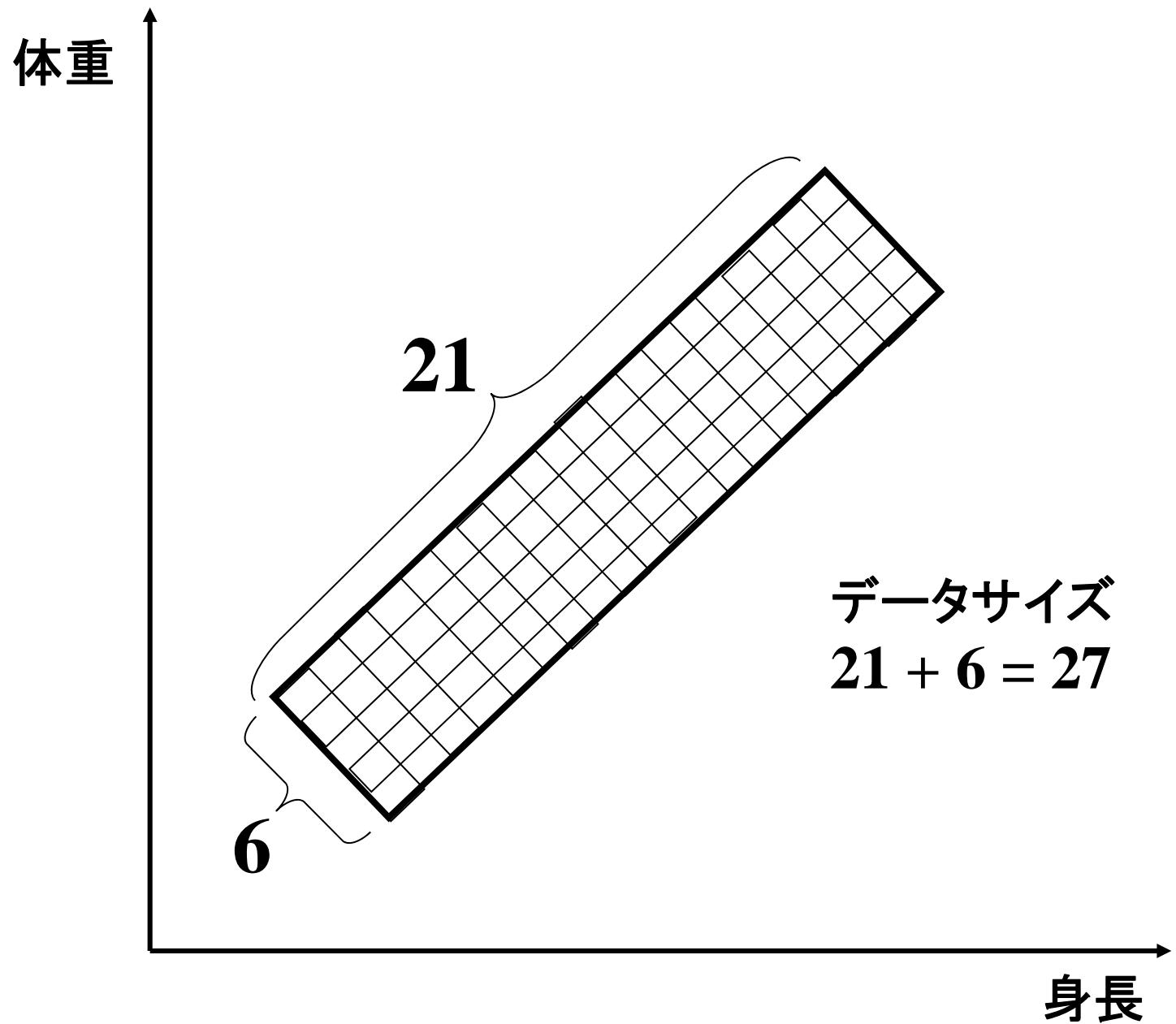
直交変換の利点



直交変換の利点



直交変換の利点

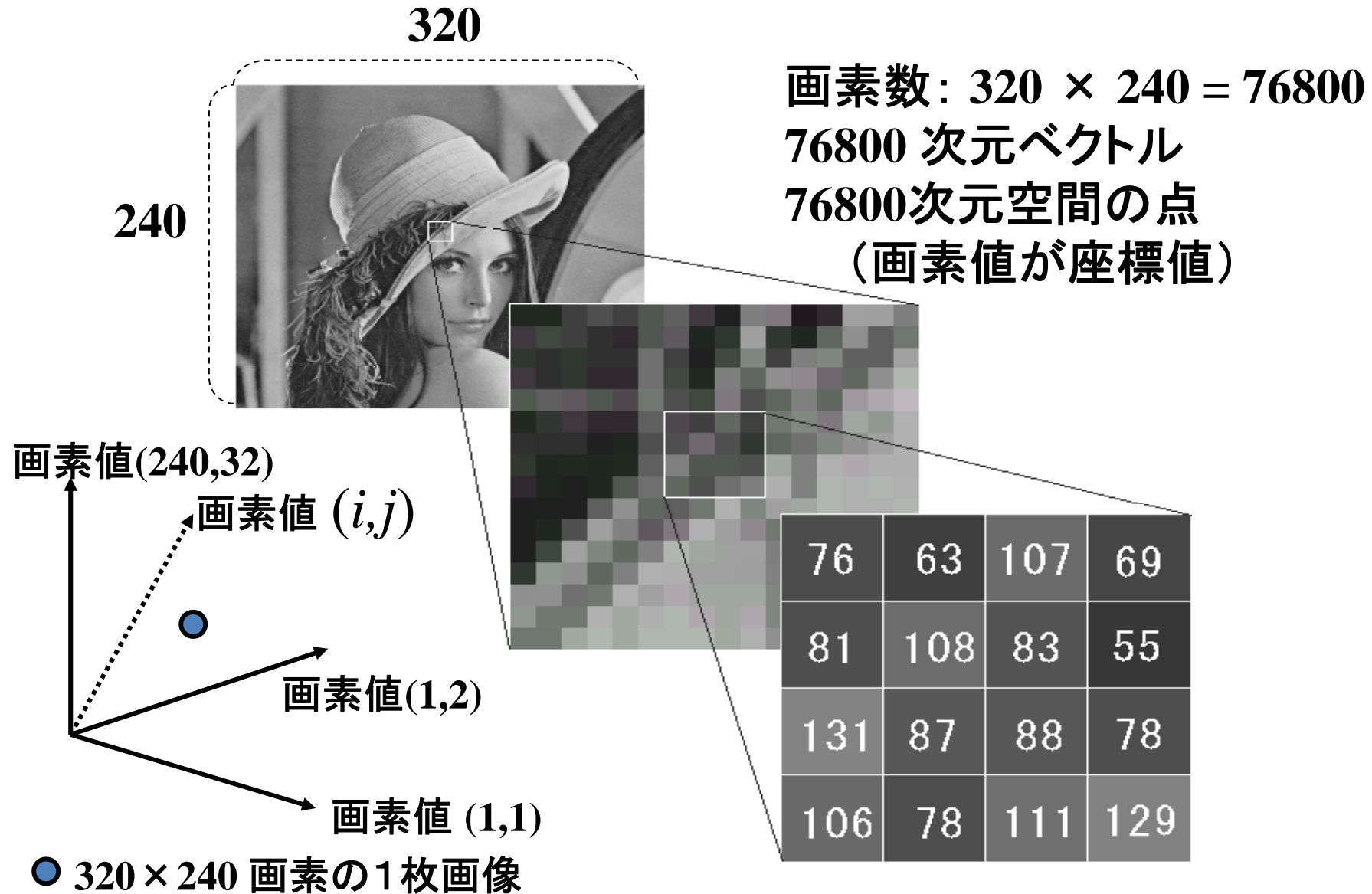


直交変換の利点

- 身長、体重の2変数
 - データサイズ $15 + 15 = 30$
 - 身長がわかれば、体重の範囲は限られる。よって、直交変換後
 - データサイズ $21 + 6 = 27$
- 身長、体重、胸囲、座高、股下の6変数
 - データサイズ $15 + 15 + 15 + 15 + 15 = 75$
 - 身長と体重がわかれば、胸囲の範囲はさらに限られる。身長、体重、胸囲がわかれば、座高の範囲はさらにさらに限られる。。。。。。よって、直交変換後
 - データサイズ $21 + 6 + 5 + 4 + 2 = 38$
- 直交変換により、(まったくのランダム雑音 = 無相関データ以外は) 多変数 (= 多次元ベクトル) のデータサイズを大幅に小さくできる。
- 例えば、画像も一種の多次元ベクトルである。

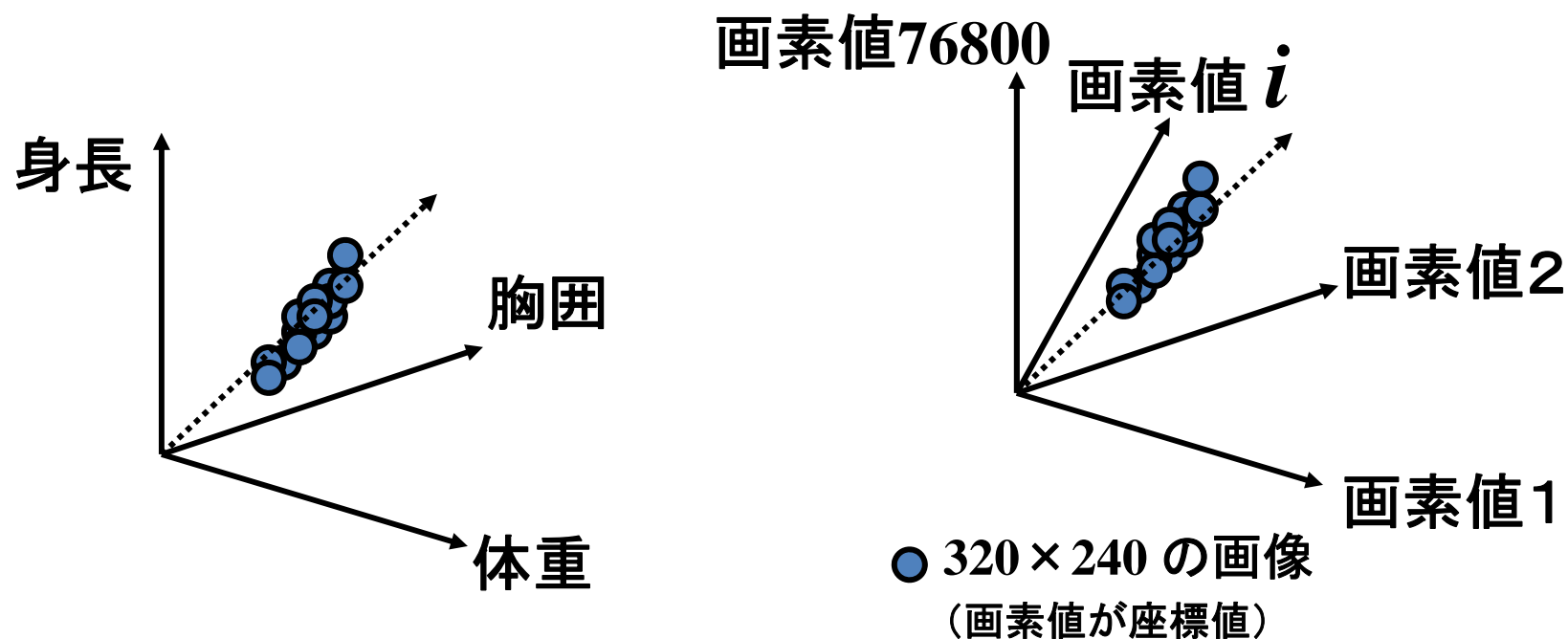
多次元ベクトルとしての画像データ

- 320 × 240画素、各画素256階調: $256 = 2^8$ (8 bit = 1 byte)



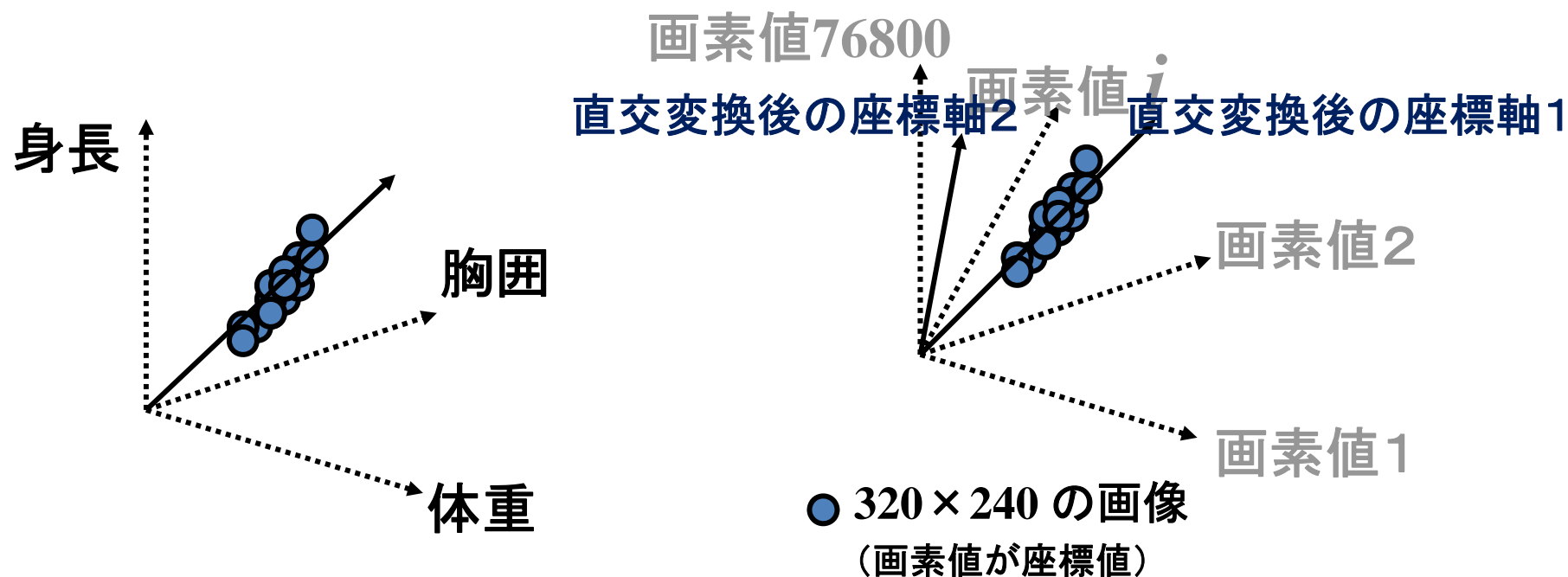
ベクトル空間について

- 各画像は、 $320 \times 240 = 76800$ 次元空間中の点と考えることができるが、 76800 次元空間の中で、普通の画像は、その空間の一部に密集しており、そのことが、データ圧縮を行える根拠になる。



ベクトル空間について

- 各画像は、 $320 \times 240 = 76800$ 次元空間中の点と考えることができるが、 76800 次元空間の中で、普通の画像は、その空間の一部に密集しており、そのことが、データ圧縮を行える根拠になる。



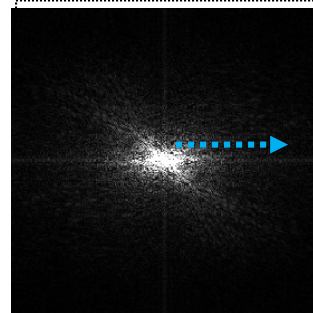
直交変換の応用

- 画像データの圧縮 (JPEGなど)



X

直交変換



$X' = TX$

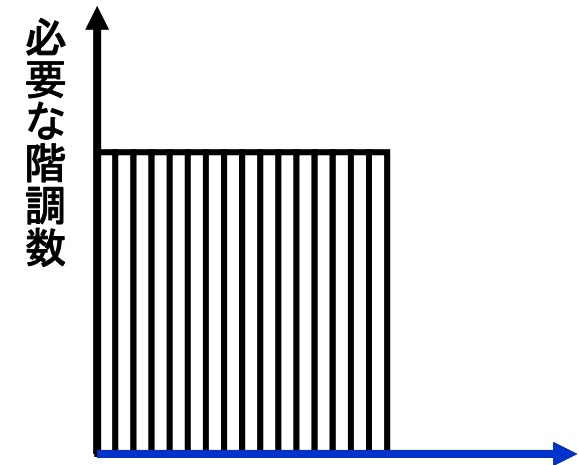
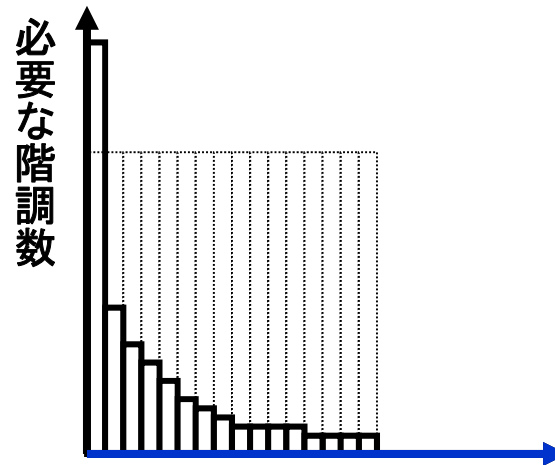
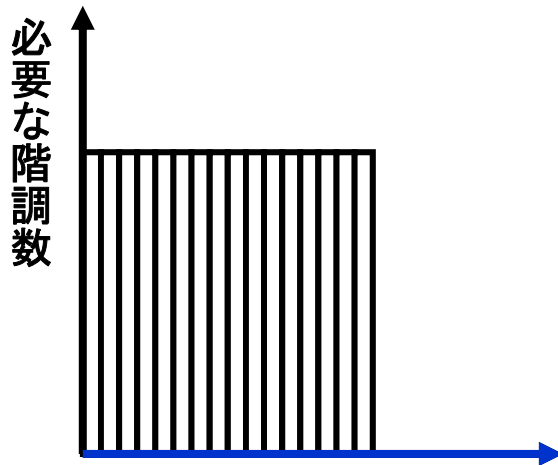
(可)逆変換



$X = T^T X'$

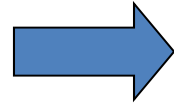
すべての画素が
256階調 (8ビット)

画像の場所によって、各画素
あたり1024階調 (10ビット)
から2階調 (1ビット)

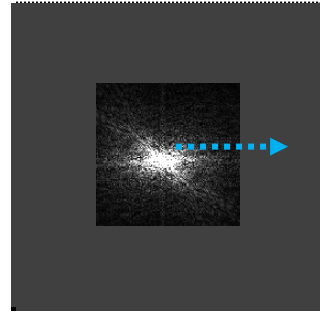


直交変換の応用

- 画像データの圧縮 (JPEGなど)



直交射影



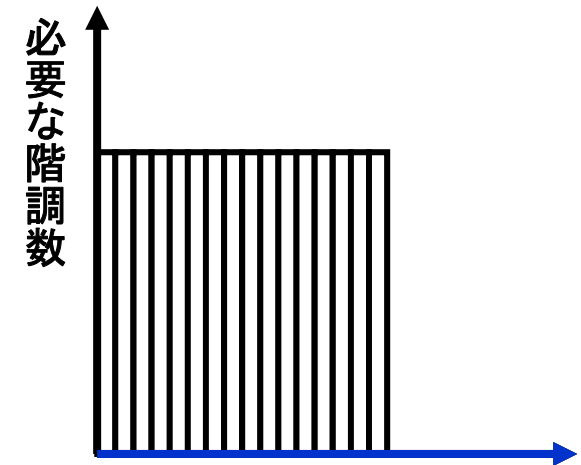
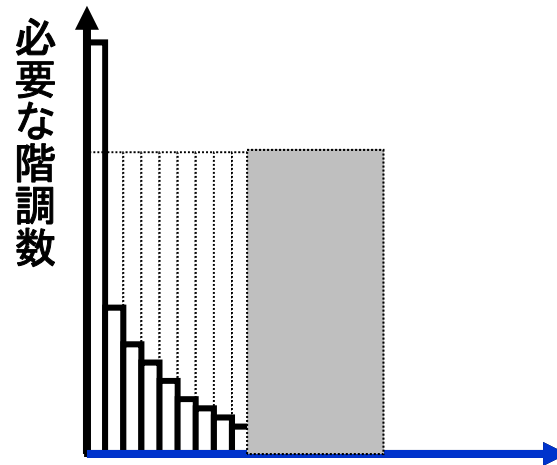
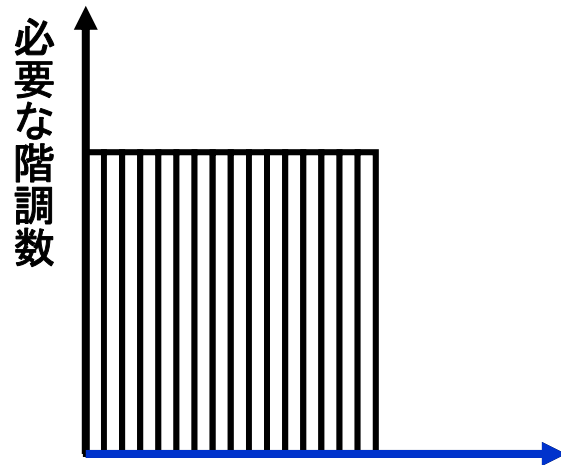
(非可)逆変換



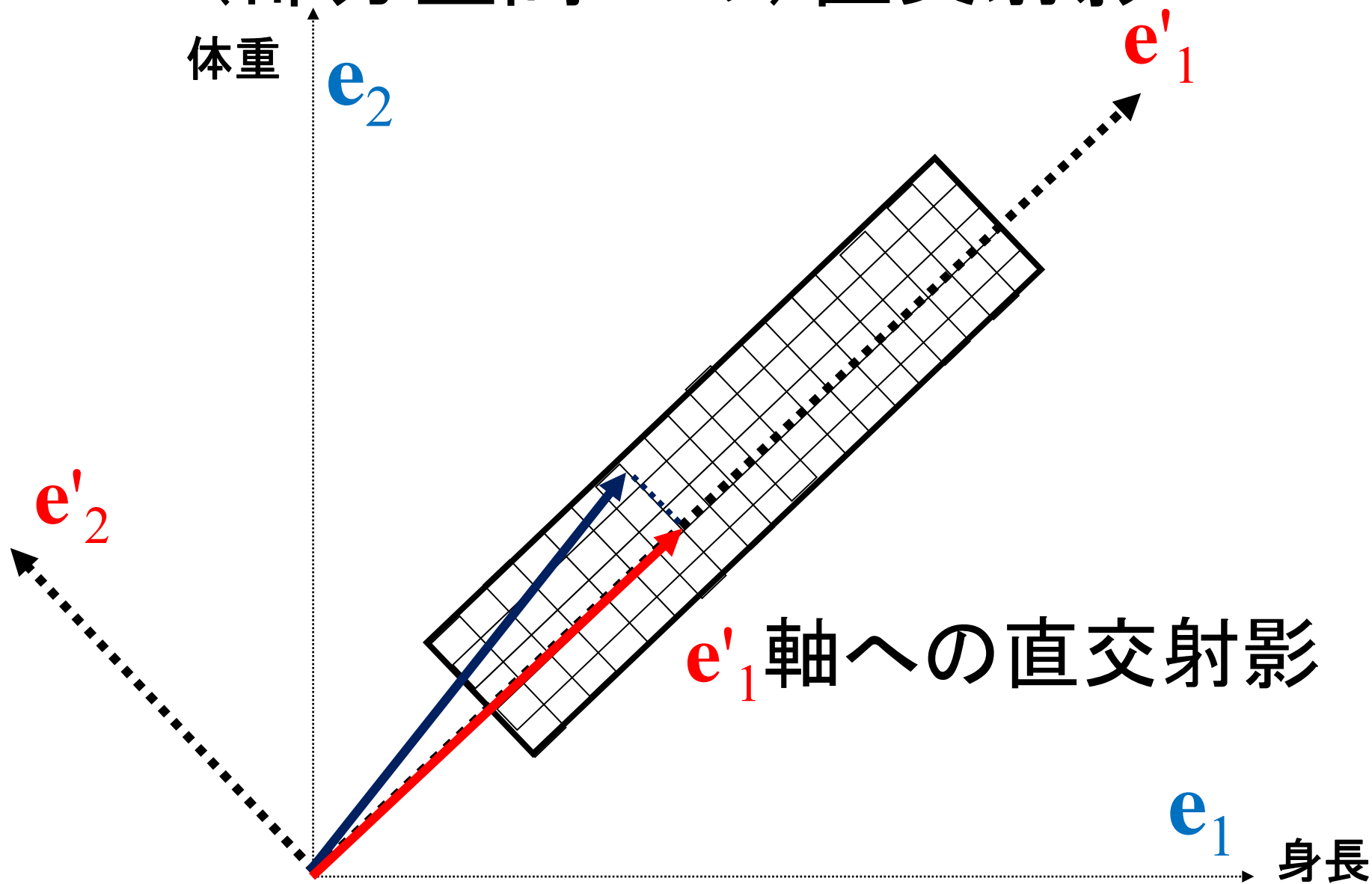
X

すべての画素が
256階調 (8ビット)

画像の場所によって、各画素
あたり1024階調 (10ビット)
から2階調 (1ビット)



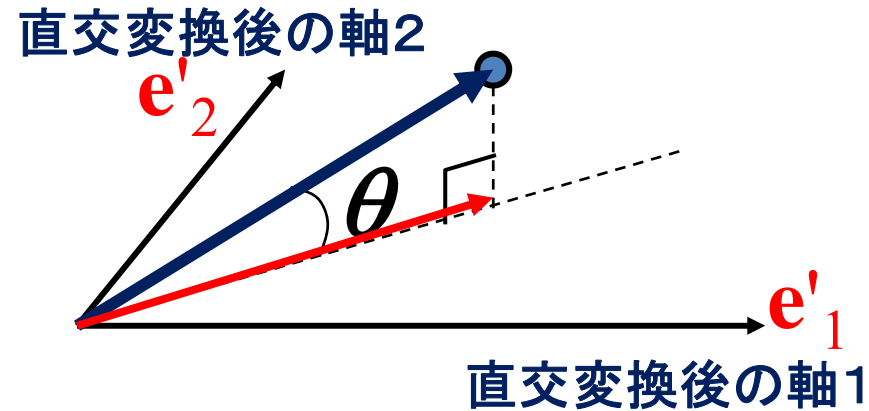
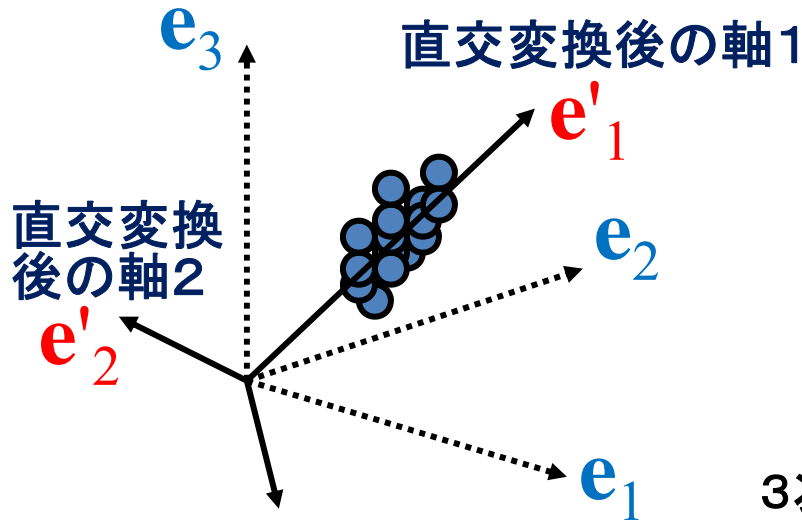
(部分空間への)直交射影



部分空間への直交射影

- 直交変換後、寄与の小さい軸を省略することで、データ次元数を減らして、データ量を削減する。

3次元空間の点を軸1と軸2で定まる
2次元平面に射影



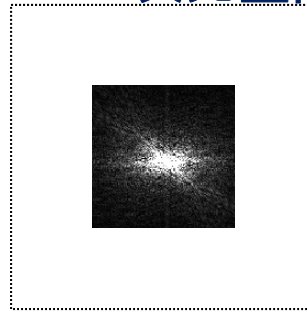
3次元空間中の点を2次元平面に射影する。
N次元空間中の点をM次元超平面に射影する。(N>M)

320 × 240次元空間の点



直交変換

160 × 120次元空間の点



320 × 240次元空間の点を
160 × 120次元超平面に射影

直交(変換)であることの必要性

直交(変換)であることの必要性

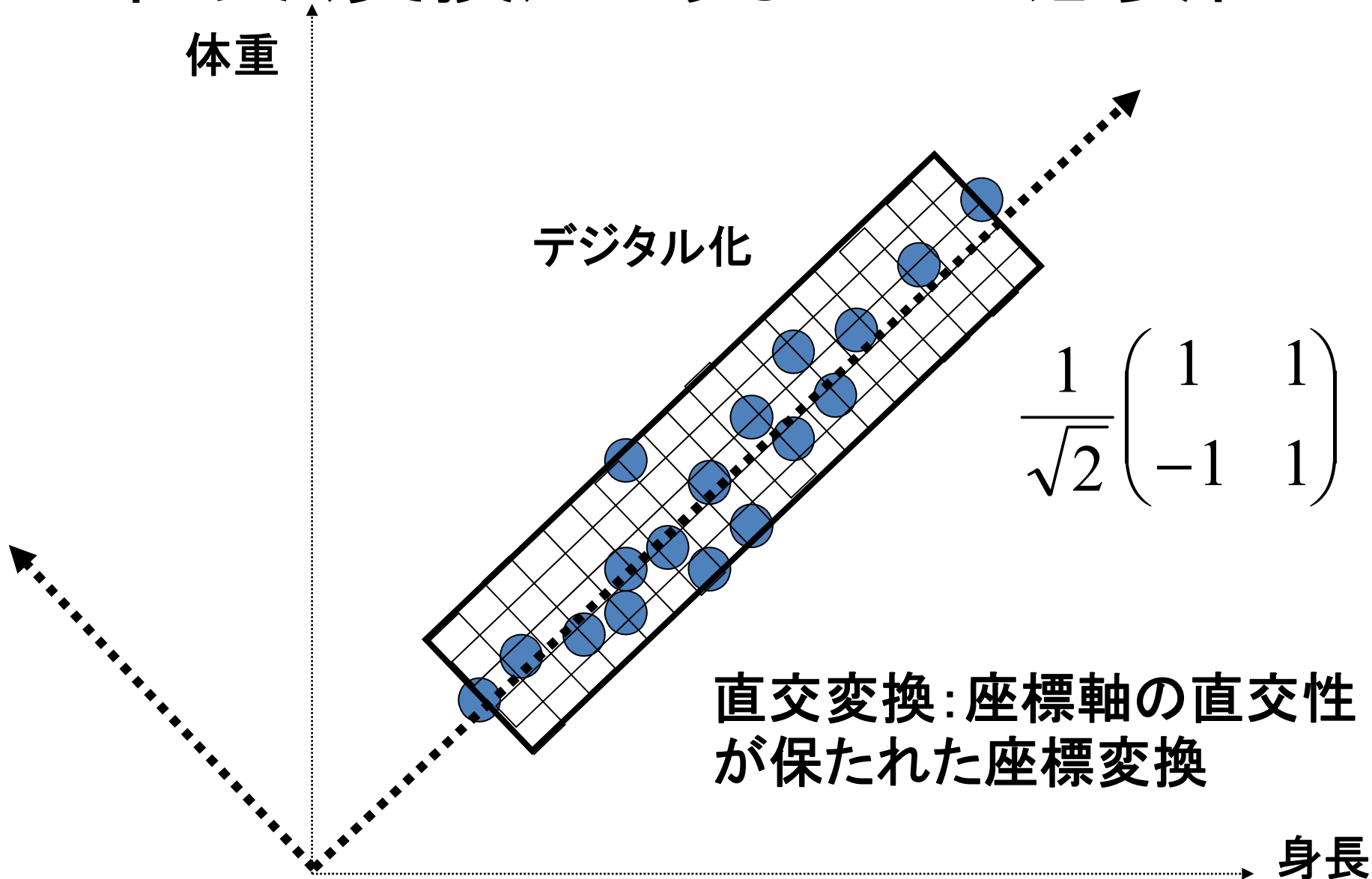
体重

デジタル化

$$\frac{1}{\sqrt{2}} \begin{pmatrix} 1 & 1 \\ -1 & 1 \end{pmatrix}$$

直交変換: 座標軸の直交性が保たれた座標変換

身長



非直交変換 (直交でない線形変換)

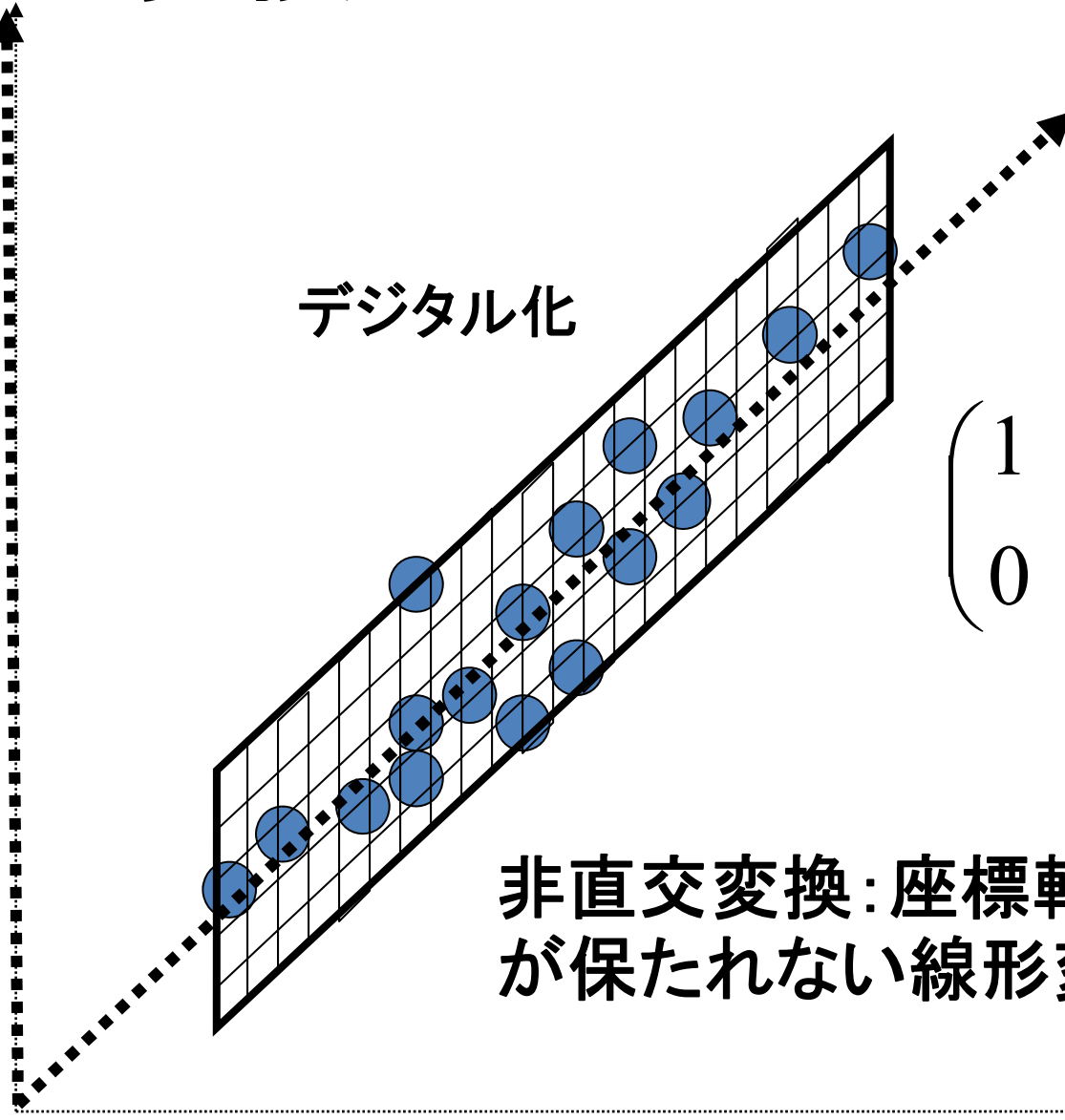
体重

デジタル化

$$\begin{pmatrix} 1 & 1 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

非直交変換: 座標軸の直交性が保たれない線形変換

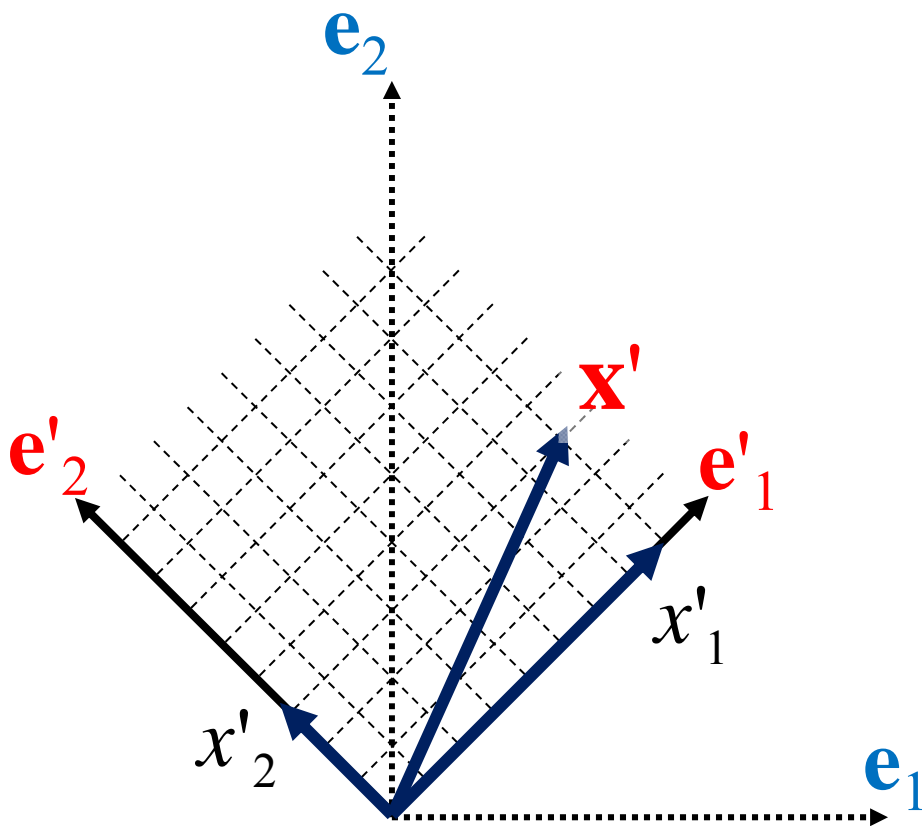
身長



直交(変換)であることの必要性

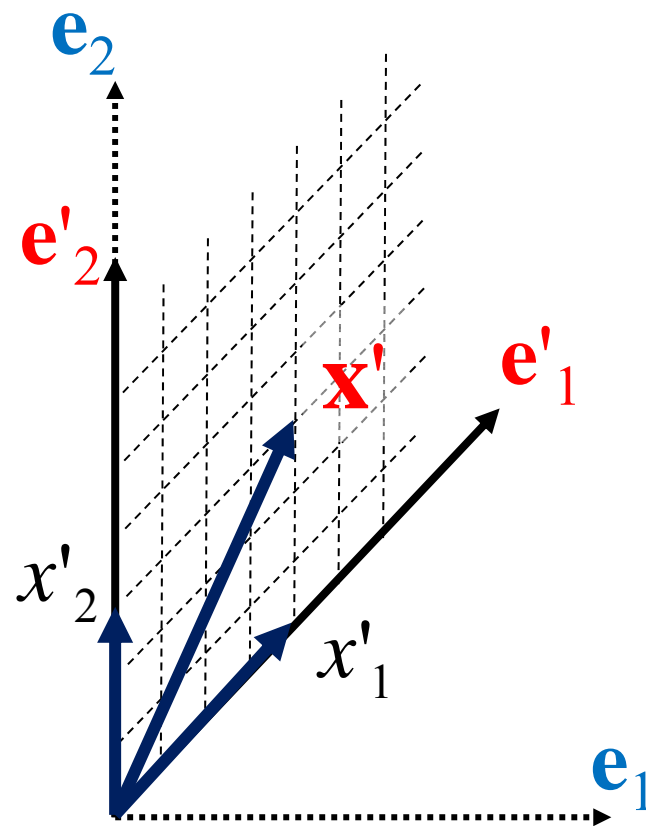
$$\mathbf{x}' = x_1 \mathbf{e}'_1 + x_2 \mathbf{e}'_2$$

$$\|\mathbf{e}'_1\| = \|\mathbf{e}'_2\| = 1$$



$$x'_1 = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_1)$$

$$x'_2 = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_2)$$

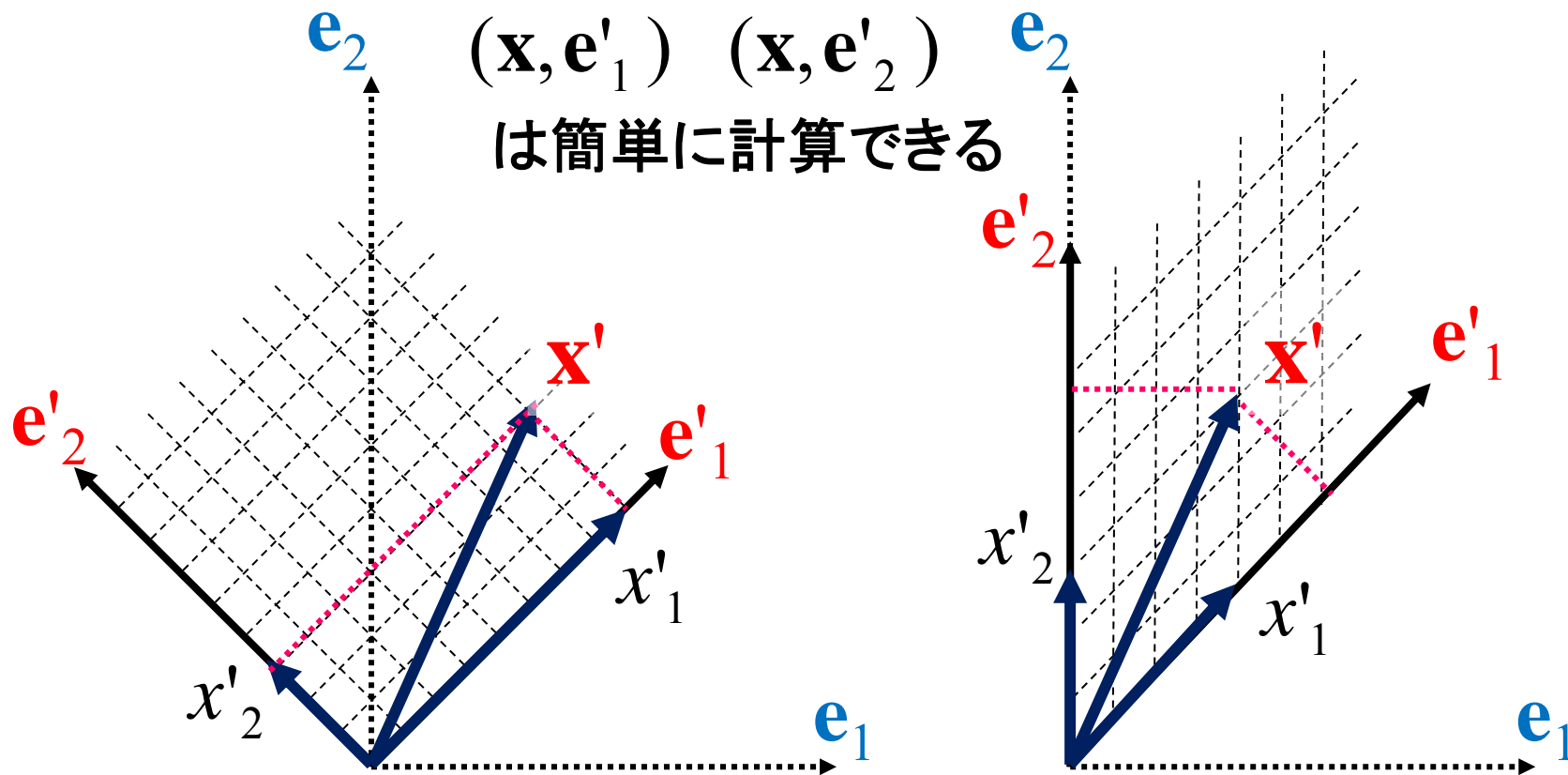


$$x'_1 + x'_2 (\mathbf{e}'_2, \mathbf{e}'_1) = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_1)$$

$$x'_2 + x'_1 (\mathbf{e}'_1, \mathbf{e}'_2) = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_2)$$

直交(変換)であることの必要性

$$\mathbf{x}' = x_1 \mathbf{e}'_1 + x_2 \mathbf{e}'_2 \quad \|\mathbf{e}'_1\| = \|\mathbf{e}'_2\| = 1$$



$$x'_1 = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_1)$$

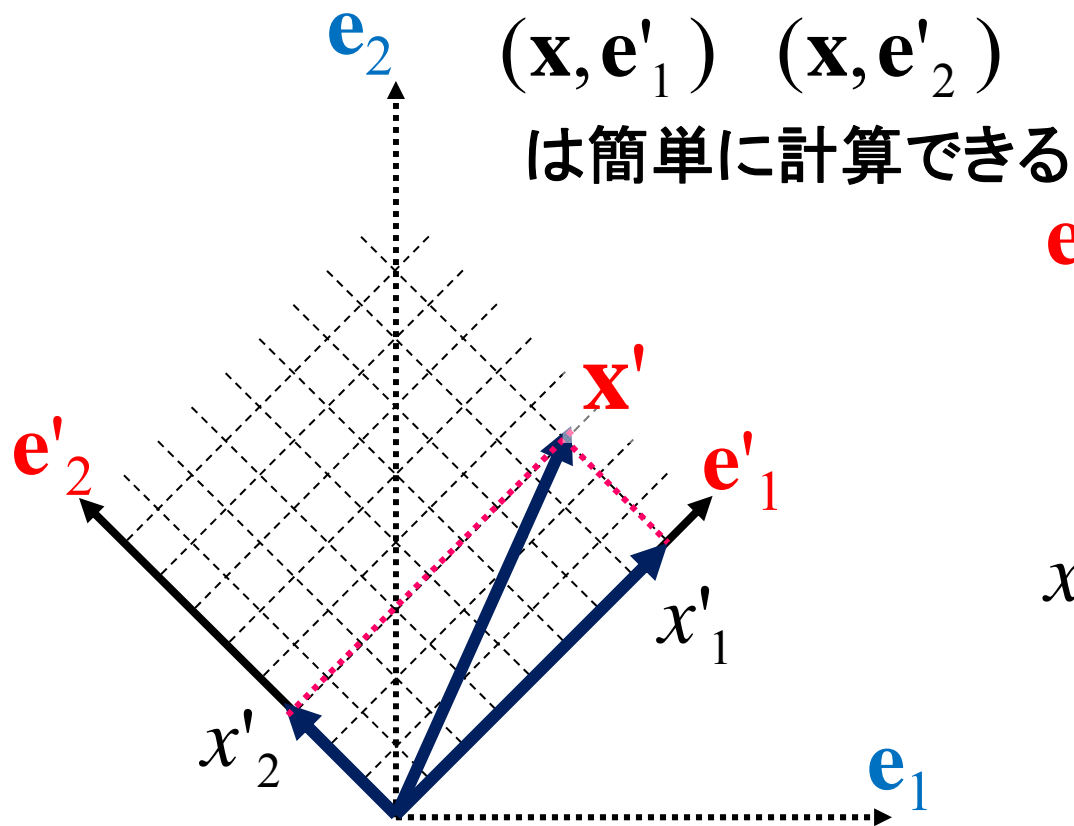
$$x'_2 = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_2)$$

$$x'_1 + x'_2 (\mathbf{e}'_2, \mathbf{e}'_1) = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_1)$$

$$x'_2 + x'_1 (\mathbf{e}'_1, \mathbf{e}'_2) = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_2)$$

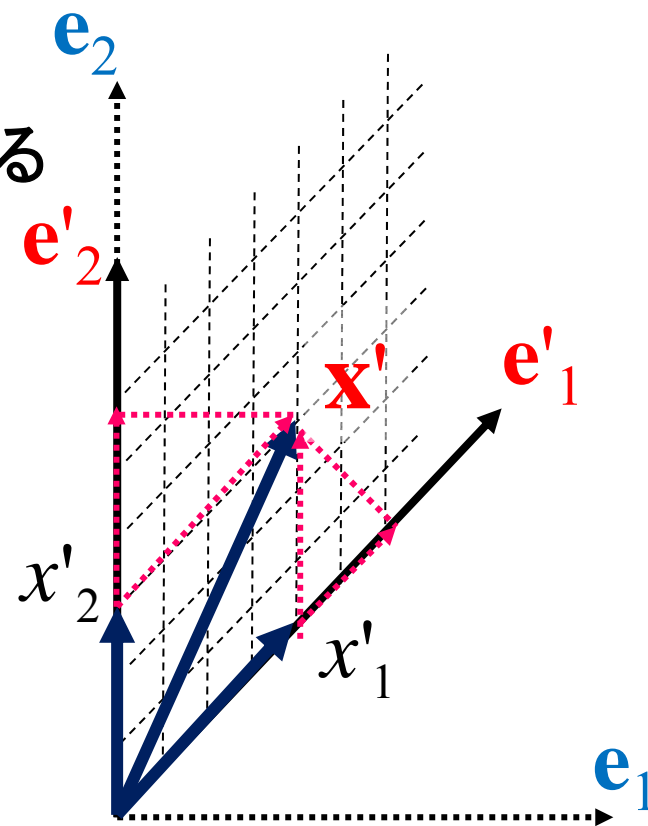
直交(変換)であることの必要性

$$\mathbf{x}' = x_1 \mathbf{e}'_1 + x_2 \mathbf{e}'_2 \quad \|\mathbf{e}'_1\| = \|\mathbf{e}'_2\| = 1$$



$$x'_1 = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_1)$$

$$x'_2 = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_2)$$



$$x'_1 + x'_2 (\mathbf{e}'_2, \mathbf{e}'_1) = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_1)$$

$$x'_2 + x'_1 (\mathbf{e}'_1, \mathbf{e}'_2) = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_2)$$

直交(変換)であることの必要性

- 直交変換の場合、変換後の座標値 x'_1, x'_2 は、元のベクトルと座標軸(基底ベクトル)の内積をとるだけで、計算できる。

$$x'_1 = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_1)$$

$$x'_2 = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_2)$$

- 直交変換でない場合、変換後の座標値 x'_1, x'_2 を求めるためには、連立方程式を解かなければならない。

$$x'_1 + x'_2 (\mathbf{e}'_2, \mathbf{e}'_1) = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_1)$$

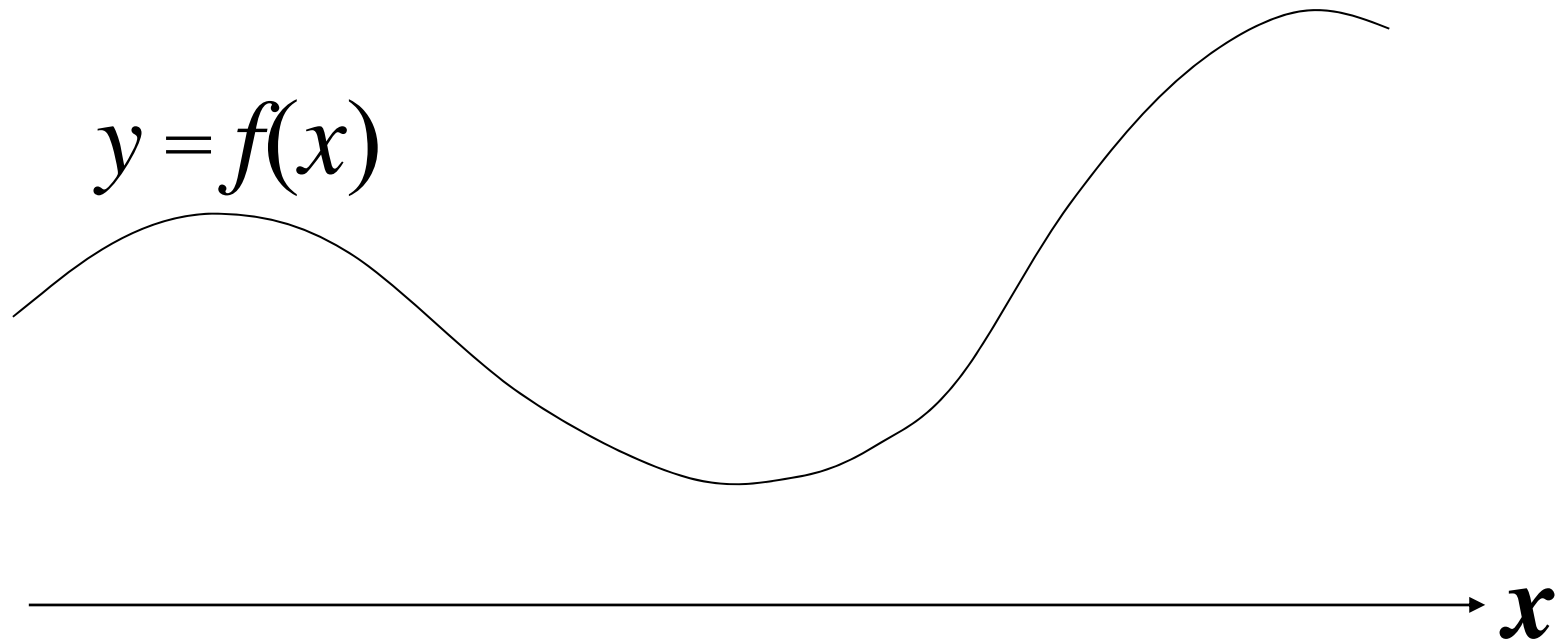
$$x'_2 + x'_1 (\mathbf{e}'_1, \mathbf{e}'_2) = (\mathbf{x}, \mathbf{e}'_2)$$

- $320 \times 240 = 76800$ 、 $160 \times 120 = 19200$ などの大量の座標値を求める場合には、大量の未知数の連立方程式を解くのは、計算機でも非常に手間がかかる。

ベクトルから関数へ

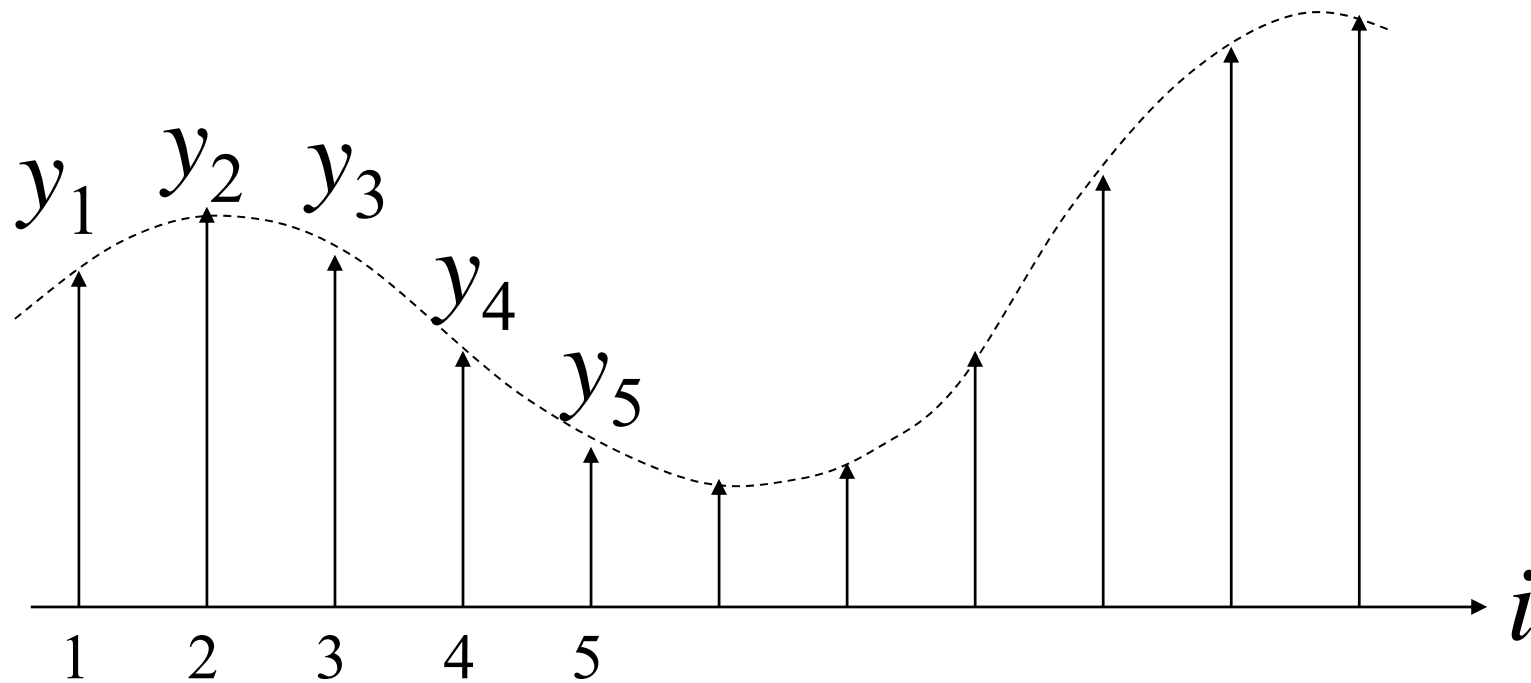
関数はベクトルである

- 関数: $y = f(x)$
- ベクトル: $\mathbf{y} = (y_1, y_2, \dots, y_i, \dots, y_n)$



関数はベクトルである

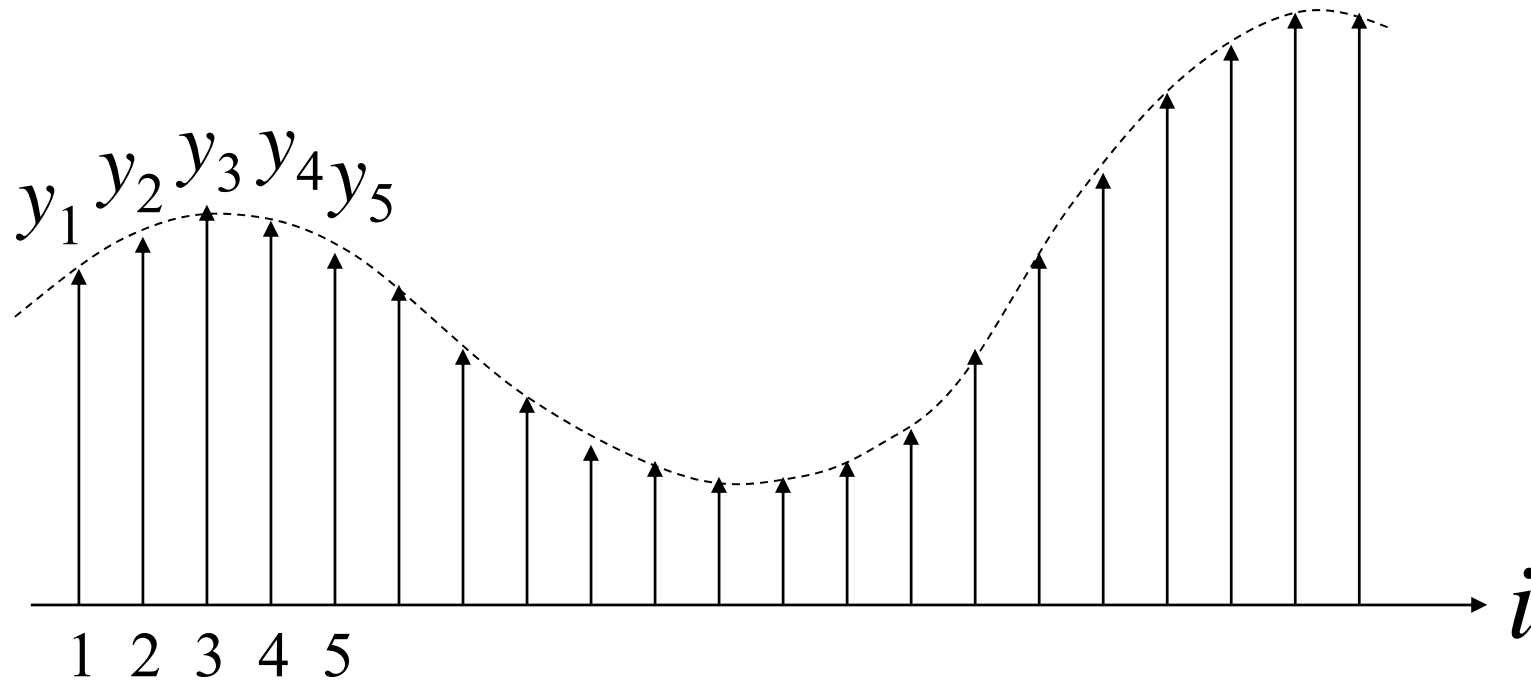
- 関数: $y = f(x)$
- ベクトル: $\mathbf{y} = (y_1, y_2, \dots, y_i, \dots, y_n)$



ある飲食店にいる客の数を1時間おきに調べてみる。

関数はベクトルである

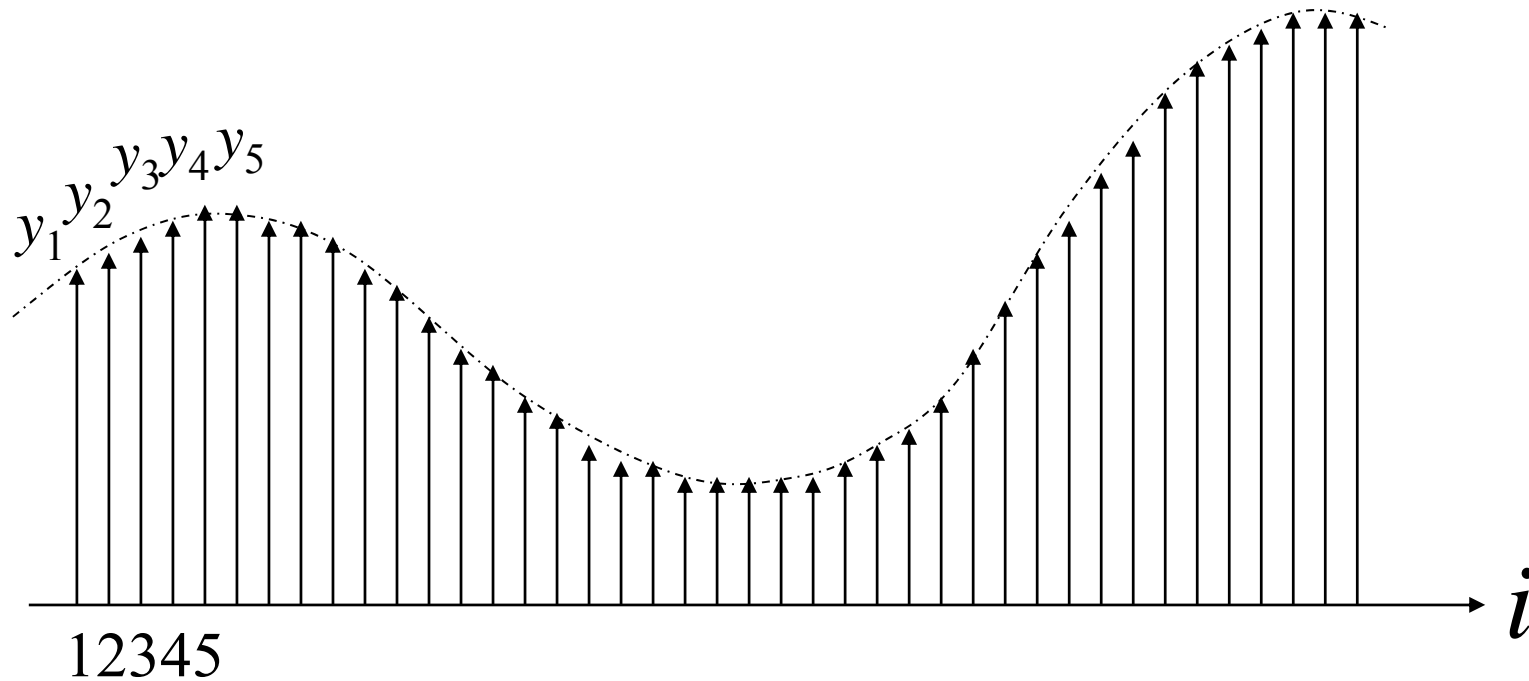
- 関数: $y = f(x)$ n を $2n$ にする
- ベクトル: $\mathbf{y} = (y_1, y_2, \dots, y_i, \dots, y_{2n})$



ある飲食店にいる客の数を30分おきに調べてみる。

関数はベクトルである

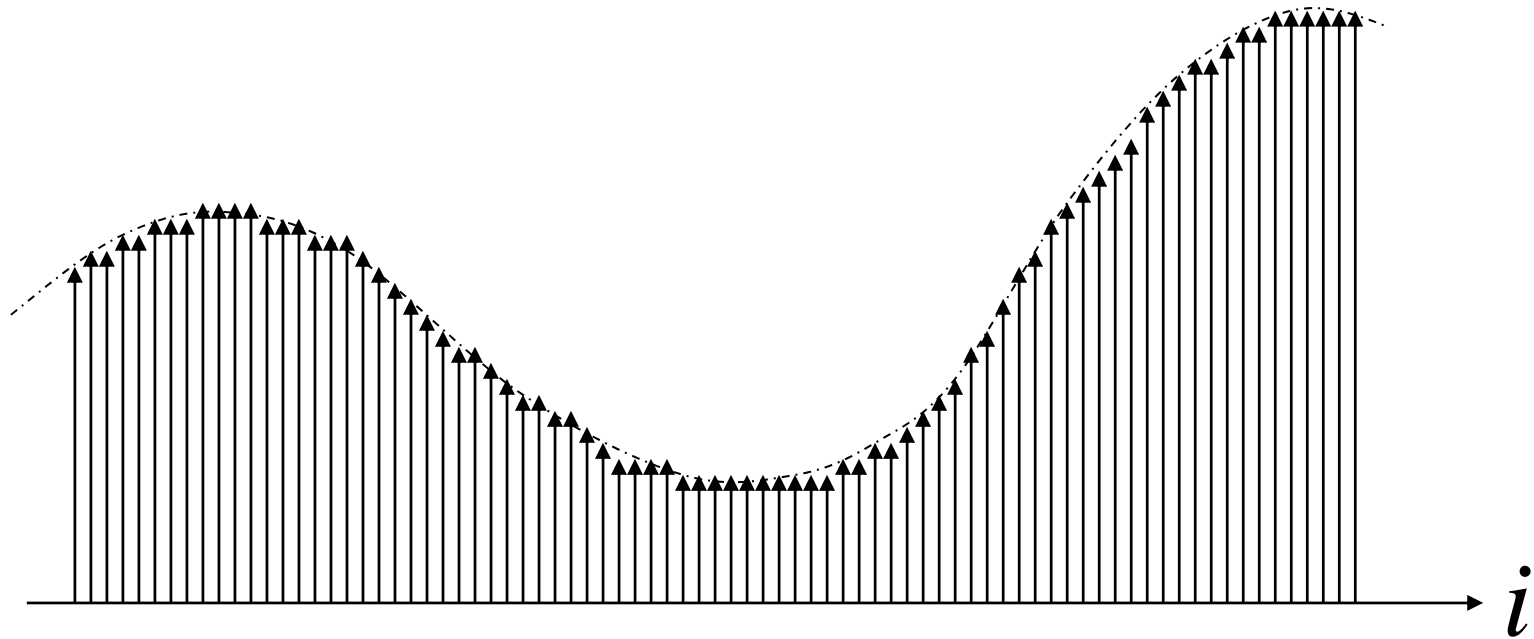
- 関数: $y = f(x)$
- ベクトル: $\mathbf{y} = (y_1, y_2, \dots, y_i, \dots, y_{4n})$



ある飲食店にいる客の数を15分おきに調べてみる。

関数はベクトルである

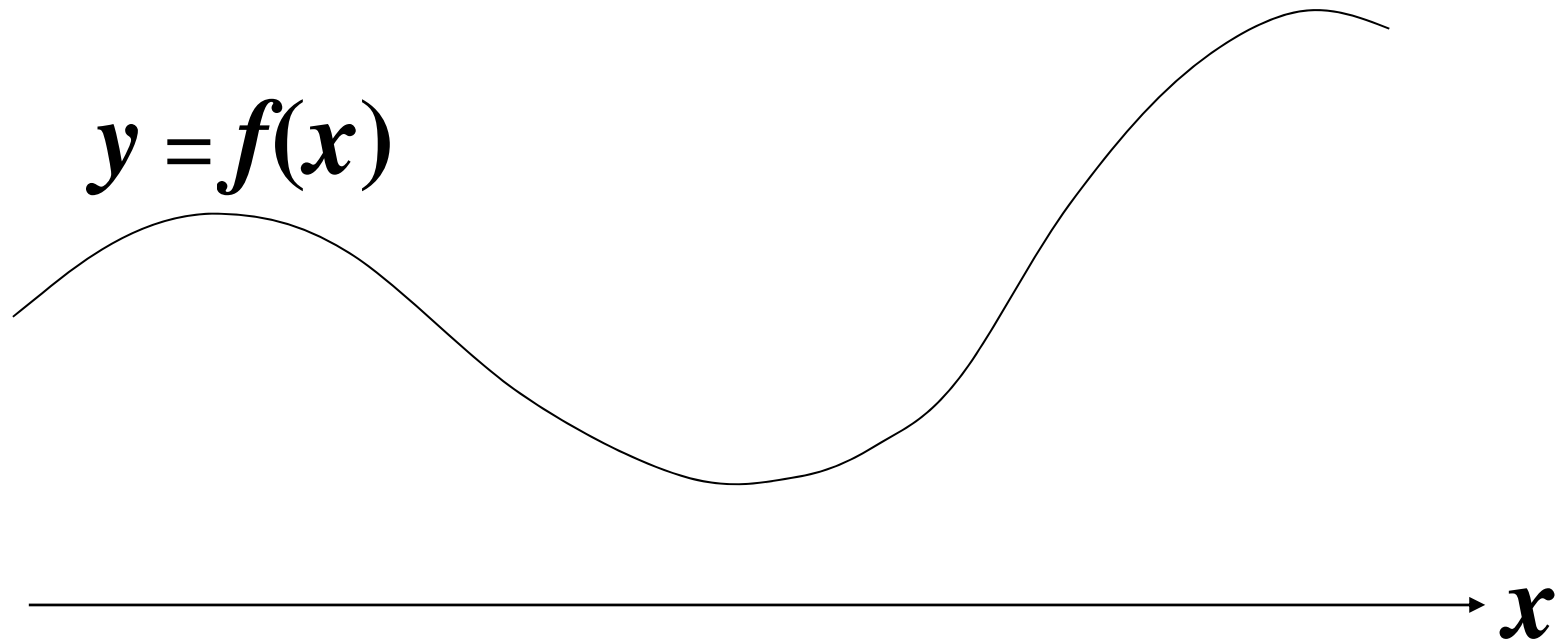
- 関数: $y = f(x)$
- ベクトル: $\mathbf{y} = (y_1, y_2, \dots, y_i, \dots, y_{8n})$



ある飲食店にいる客の数を7.5分おきに調べてみる。

関数は(無限次元)ベクトルである

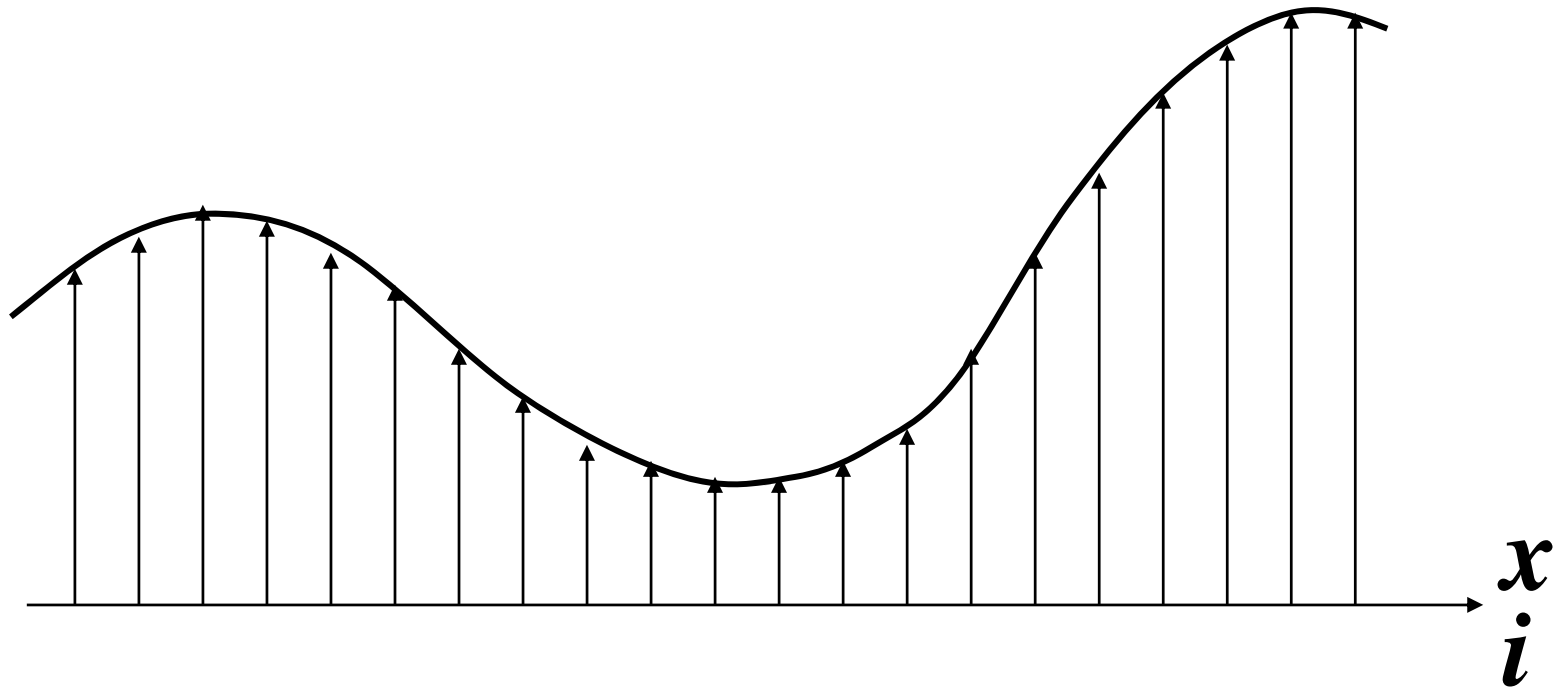
- 関数: $y = f(x)$
- ベクトル: $\mathbf{y} = (y_1, y_2, \dots, y_i, \dots, y_\infty)$



ある飲食店にいる客の数を常時調べる。

関数は(無限次元)ベクトルである

- 関数: $y = f(x)$ 連続的
- ベクトル: $\mathbf{y} = (y_1, y_2, \dots, y_i, \dots, y_n)$ 離散的

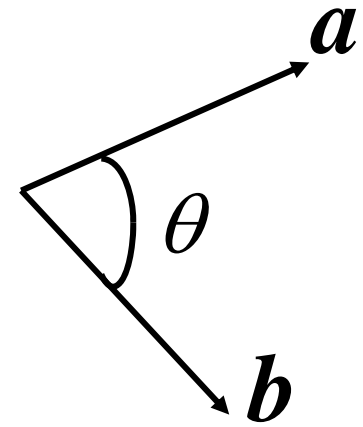


ベクトルの直交条件

- n 次元ベクトルの場合

$$\mathbf{a} = (a_1, a_2, \dots, a_i, \dots, a_n)$$

$$\mathbf{b} = (b_1, b_2, \dots, b_i, \dots, b_n)$$



直交条件 = 内積がゼロ

$$\begin{aligned} (\mathbf{a}, \mathbf{b}) &= a_1 b_1 + a_2 b_2 + \dots + a_i b_i + \dots + a_n b_n \\ &= \sum_{i=1}^n a_i b_i = |\mathbf{a}| \cdot |\mathbf{b}| \cos \theta = 0 \end{aligned}$$

関数（無限次元ベクトル）の直交条件

- 関数の場合

$$y = f(x)$$

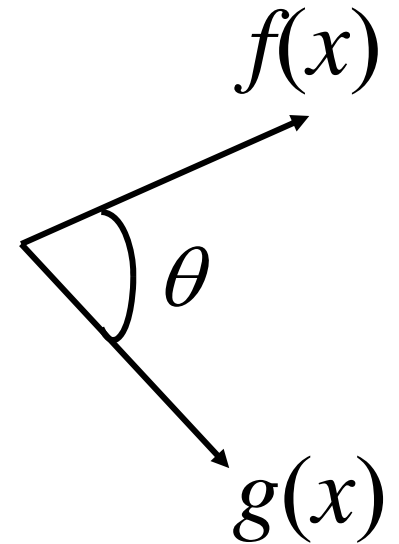
$$y = g(x)$$

直交条件 = 内積がゼロ

$$(f(x), g(x))$$

$$= \int f(x)g(x)dx$$

$$= |f(x)| \cdot |g(x)| \cos \theta$$



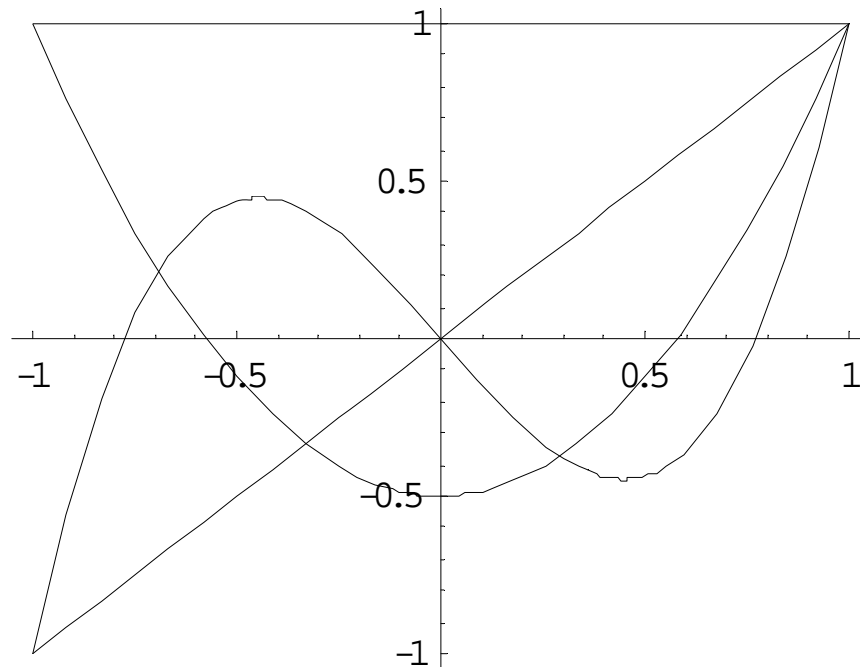
直交関数系

直交関数系

互いに直交する一連の関数の集合

- ルジャンドルの多項式

$$P_n(x), n = 1, 2, 3, \dots (-1 \leq x \leq 1)$$



$$P_0(x) = 1$$

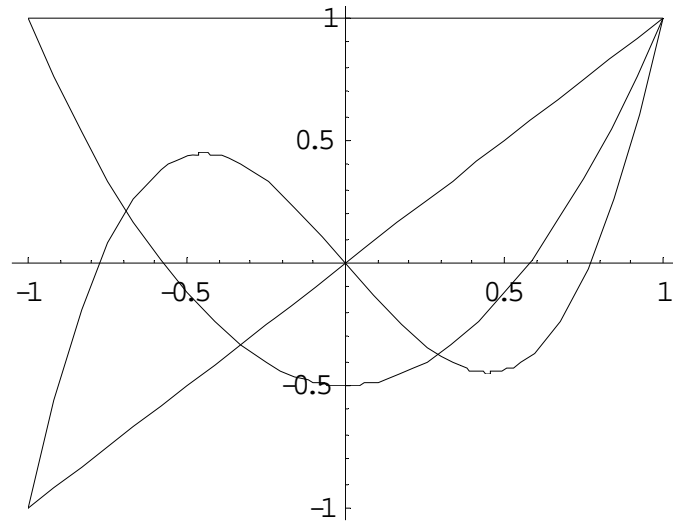
$$P_1(x) = x$$

$$P_2(x) = \frac{1}{2}(3x^2 - 1)$$

$$P_3(x) = \frac{1}{2}(5x^3 - 3x)$$

直交関数系

- ルジャンドルの多項式 $P_n(x), n = 1, 2, 3, \dots (-1 \leq x \leq 1)$



$$P_0(x) = 1$$

$$P_1(x) = x$$

$$P_2(x) = \frac{1}{2}(3x^2 - 1)$$

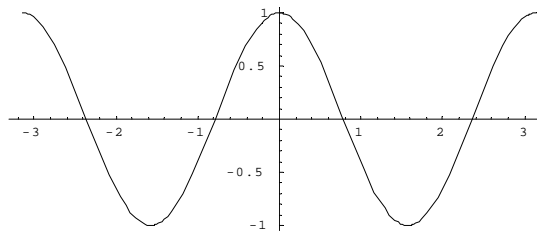
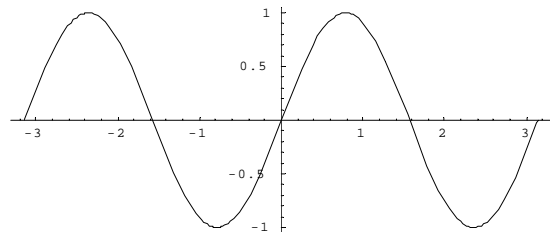
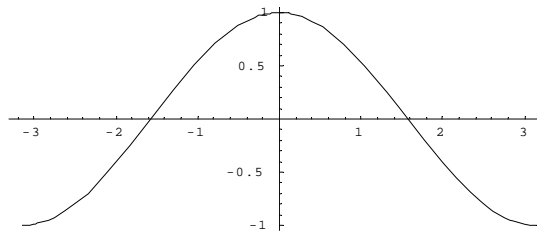
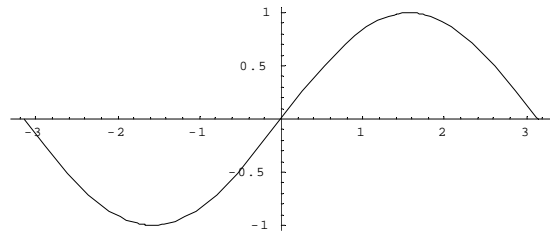
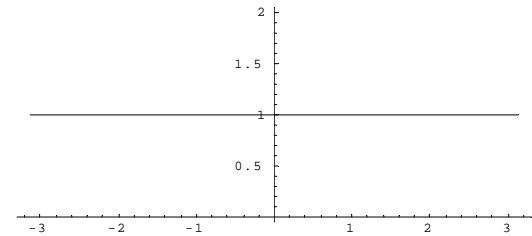
$$P_3(x) = \frac{1}{2}(5x^3 - 3x)$$

演習問題OT-1: ルジャンドル多項式が直交関数系であること(以下の直交条件が成立していること)を確かめよ。

$$\int_{-1}^1 P_i(x)P_j(x)dx = 0 \quad (i \neq j)$$

直交関数系

- 三角関数系 $(-\pi \leq x \leq \pi)$



演習問題OT-2: 三角関数系が直交関数系であることを確かめよ。

$$C_0(x) = \frac{1}{2}$$

$$S_1(x) = \sin x$$

$$C_1(x) = \cos x$$

$$S_2(x) = \sin 2x$$

$$C_2(x) = \cos 2x$$

$$S_3(x) = \sin 3x$$

$$C_3(x) = \cos 3x$$

⋮

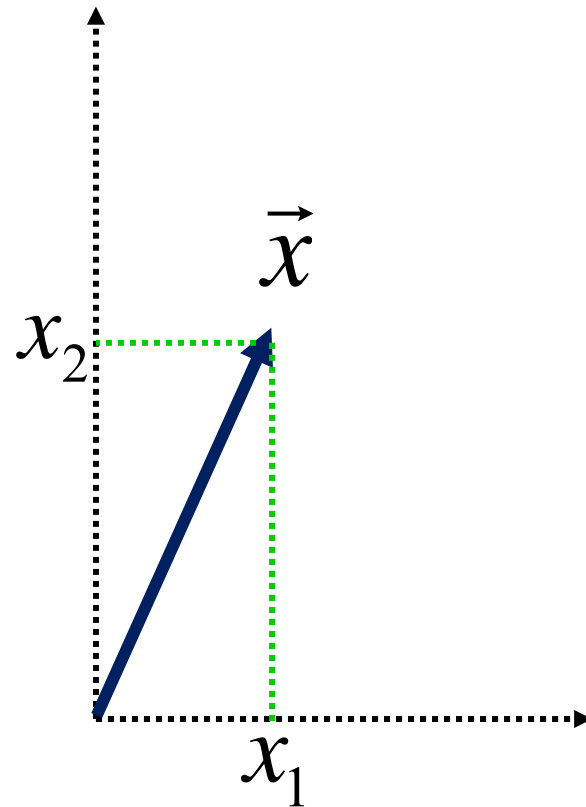
$$(-\pi \leq x \leq \pi)$$

直交関数展開

直交変換(直交展開)

- 直交変換したいベクトル $x=(x_1, x_2, \dots, x_n)$ と直交基底 u_1, u_2, \dots, u_n の内積をとる。
- 直交変換後のベクトル (以後、内積をドットで表現している)

$$x' = (k_1, k_2, \dots, k_n) = (x \cdot u_1, x \cdot u_2, \dots, x \cdot u_n)$$



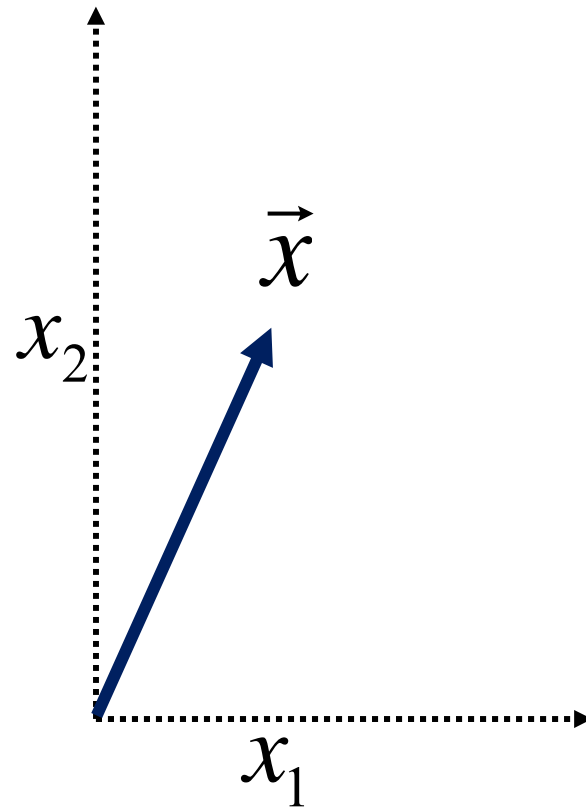
$$k_1 = \vec{x} \cdot \vec{u}_1$$

$$k_2 = \vec{x} \cdot \vec{u}_2$$

直交変換(直交展開)

- 直交変換したいベクトル $x=(x_1, x_2, \dots, x_n)$ と直交基底 u_1, u_2, \dots, u_n の内積をとる。
- 直交変換後のベクトル (以後、内積をドットで表現している)

$$x' = (k_1, k_2, \dots, k_n) = (x \cdot u_1, x \cdot u_2, \dots, x \cdot u_n)$$



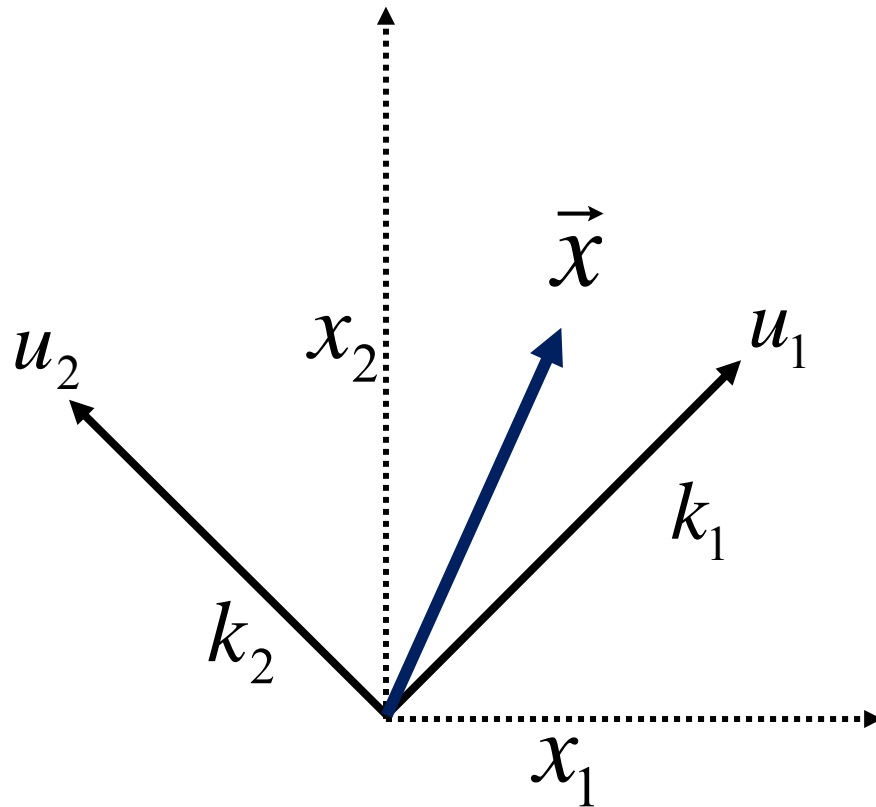
$$k_1 = \vec{x} \cdot \vec{u}_1$$

$$k_2 = \vec{x} \cdot \vec{u}_2$$

直交変換(直交展開)

- 直交変換したいベクトル $\mathbf{x}=(x_1, x_2, \dots, x_n)$ と直交基底 $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n$ の内積をとる。
- 直交変換後のベクトル (以後、内積をドットで表現している)

$$\mathbf{x}' = (k_1, k_2, \dots, k_n) = (\mathbf{x} \cdot \mathbf{u}_1, \mathbf{x} \cdot \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{x} \cdot \mathbf{u}_n)$$



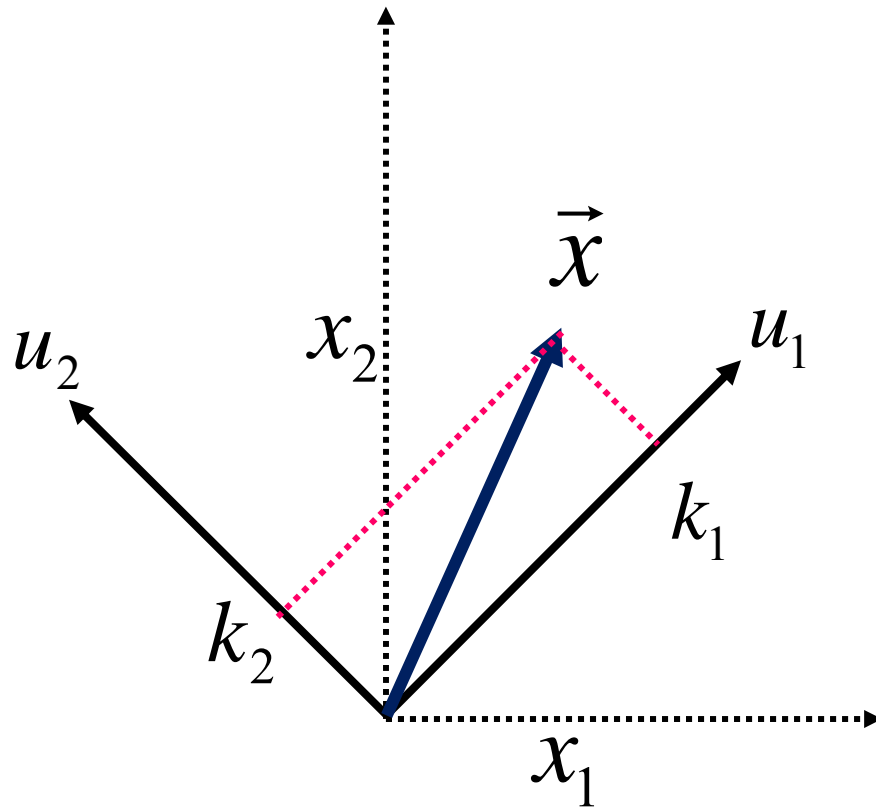
$$k_1 = \vec{x} \cdot \vec{u}_1$$

$$k_2 = \vec{x} \cdot \vec{u}_2$$

直交変換(直交展開)

- 直交変換したいベクトル $\mathbf{x}=(x_1, x_2, \dots, x_n)$ と直交基底 $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n$ の内積をとる。
- 直交変換後のベクトル (以後、内積をドットで表現している)

$$\mathbf{x}' = (k_1, k_2, \dots, k_n) = (\mathbf{x} \cdot \mathbf{u}_1, \mathbf{x} \cdot \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{x} \cdot \mathbf{u}_n)$$



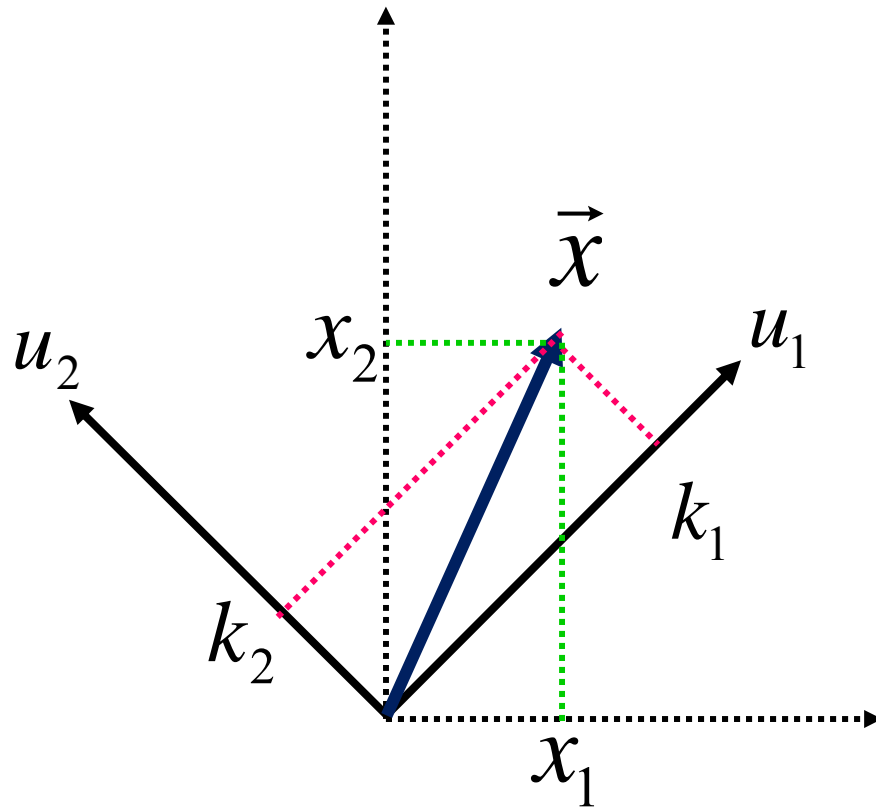
$$k_1 = \vec{x} \cdot \vec{u}_1$$

$$k_2 = \vec{x} \cdot \vec{u}_2$$

直交変換(直交展開)

- 直交変換したいベクトル $\mathbf{x}=(x_1, x_2, \dots, x_n)$ と直交基底 $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n$ の内積をとる。
- 直交変換後のベクトル (以後、内積をドットで表現している)

$$\mathbf{x}' = (k_1, k_2, \dots, k_n) = (\mathbf{x} \cdot \mathbf{u}_1, \mathbf{x} \cdot \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{x} \cdot \mathbf{u}_n)$$



$$k_1 = \vec{x} \cdot \vec{u}_1$$

$$k_2 = \vec{x} \cdot \vec{u}_2$$

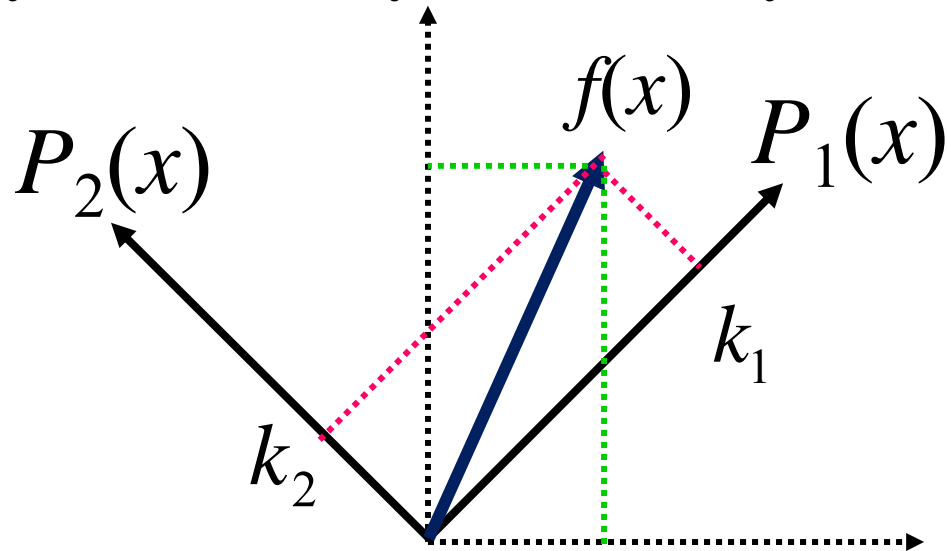
直交関数展開

- 直交関数展開したい関数 $f(x)$ と直交基底 $P_0(x), P_1(x), P_2(x), \dots, P_i(x) \dots$ の内積をとる。
- 直交関数展開後の係数

$$(k_0, k_1, k_2, \dots, k_i, \dots)$$

$$= (f(x) \cdot P_0(x), f(x) \cdot P_1(x), f(x) \cdot P_2(x), \dots, f(x) \cdot P_i(x), \dots)$$

$$= \left(\int f(x)P_0(x)dx, \int f(x)P_1(x)dx, \int f(x)P_2(x)dx, \dots, \int f(x)P_i(x)dx, \dots \right)$$



$$k_0 = \int f(x)P_0(x)dx$$

$$k_1 = \int f(x)P_1(x)dx$$

$$k_2 = \int f(x)P_2(x)dx$$

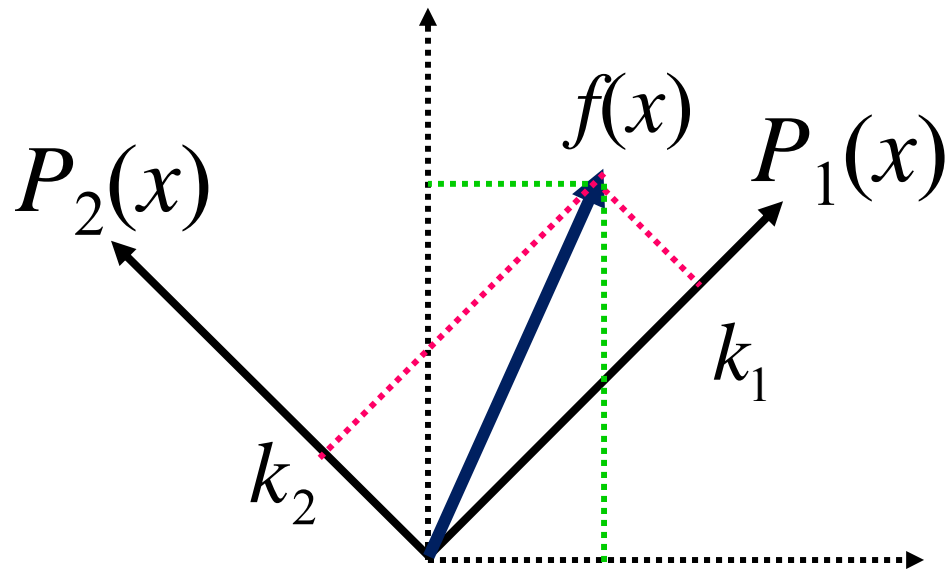
直交関数展開

- 直交関数展開したい関数 $f(x)$ と直交基底 $P_0(x), P_1(x), P_2(x), \dots, P_i(x) \dots$ の内積をとる。
- 直交関数展開

$$f(x) \approx k_0 P_0(x) + k_1 P_1(x) + k_2 P_2(x) + \dots k_i P_i(x) + \dots$$

$$(k_0, k_1, k_2, \dots, k_i, \dots)$$

$$= (f(x) \cdot P_0(x), f(x) \cdot P_1(x), f(x) \cdot P_2(x), \dots, f(x) \cdot P_i(x), \dots)$$



$$k_0 = \int f(x) P_0(x) dx$$

$$k_1 = \int f(x) P_1(x) dx$$

$$k_2 = \int f(x) P_2(x) dx$$

演習問題OT-3

1. n 次元ベクトル \mathbf{x} を正規直交基底 $\mathbf{u}_1, \mathbf{u}_2, \dots, \mathbf{u}_n$ で、次のように直交展開できる。展開係数 a_i を示せ。

$$\mathbf{x} = \sum_{i=1}^n a_i \mathbf{u}_i$$

2. 関数 $f(t)$ を区間 $a \leq t \leq b$ 上の正規直交関数系 $\phi_i(t)$ ($i=1, 2, \dots, \infty$) で次のように直交関数展開できる。展開係数 c_i を示せ。

$$f(t) = \sum_{i=1}^{\infty} c_i \phi_i(t)$$

なお、区間 $a \leq t \leq b$ 上の正規直交関数系 $\phi_i(t)$ は以下を満足する。

3. 以下が成り立つことを証明せよ。

$$\int_a^b \phi_i(t) \phi_j(t) dt = \delta_{ij} \quad (\delta_{ij} \text{ は、クロネッカーのデルタ})$$

$$\int_a^b f^2(t) dt = \sum_{i=1}^{\infty} c_i^2$$

4. この証明は、直観的には、「 $f(t)$ という(無限次元)ベクトルを、異なる正規直交基底(直交関数系)で表したとしても、ベクトルの大きさは変わらない。」ということの意味する。無限次元空間を2次元空間に縮退させた状況で、この直観的意味を、図解せよ。

参考文献

- 最小二乗法、直交関数展開などマルチメディアデータ解析の基礎数理に関する参考書
 - これなら分かる応用数学教室
 - 最小二乗法からウェーブレットまで
 - 金谷健一著
 - 共立出版
 - 3045円